

Fate/Subsequent

マッポーゲニア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冬木の第五次聖杯戦争の十年後に行われた解体戦争により、聖杯は解体。長きに渡る魔術師と英雄のいがみ合いに終止符が打たれたはずだった。極東のとある島の中央に位置する街、海谷市で聖杯が出現。7人のマスターは、己が契約したサーヴァントと共に野望を抱いて夜へ赴く。そんな中、少女は、1人の『英雄』と出逢う。

Fateの二次創作です。

大まかな設定はFate本家のを引き継いでおりますが、主な登場人物、サーヴァント、舞台はオリジナルとなっております。ご了承ください

目次

第1話	親愛なる君へ	1
第2話	誰がために幕は開く	11
第3話	フーカ・イン・マジックランド	20
第4話	サーヴァントは召喚主の運命を見るか？	27
第5話	オカルティアン・ラプソディ	36
第6話	二人主屋敷の契	48
第7話	いくさ間も無し 備えよ乙女	65

第1話 親愛なる君へ

とある所の暗い夜、

それが終わった。

「やったぞ、勝ったぞ！セイバー。これで全てが終わった！」

「ああ!!…… ってことは、これでゲンイチともお別れ。って言うことになるな」

セイバーは半ば作った笑いで俺を祝福した。

そうだった。来るべき時が来てしまったのだ。根源へ到達するには6騎と残った1騎、つまり目の前にいるセイバーを自害させなければいけない。

「…… なあセイバー」

「どうした？」

「願いつて残酷だよな。いや、人間が欲張りつつうべきか。一つしか叶えられねえつてなると、二つ、三つって不思議に叶えたい願いが増えてしまうんだよな……」

「それでさ、なんでもないようなつまんねえ願いも大切に錯覚してしまつて、結局迷っちゃう」

目のあたりが熱い。こういうのは記憶する中で生まれて初めてだ。

「…… 泣いてんのか……？ゲンイチ。」

「ハハッ。そうかもしれないねえな。あまり知らねえんだ。こういうの」

俺は手で、目から出る水を拭った。拭き損ねたのか、その水が少しばかり口に入った。しょっぱく、ほんの少しだけ甘さを感じる。

「…… わかるぞ。オレも泣いたのは片手で数えるくらいだったからな」

気がつくくと、俺はうずくまっていた。セイバーは、そんな俺の背中をさすっている。ここからは顔が見えなかつたが俺にはわかる。きつと、憐れみと同情と、その他の色々な感情を持ちながら笑っているんだろう。

でも、やる時はやらなくちゃあならない。こういう風の吹き回しだったのだ

「……令呪を以て命ずる」

くくくく

ぼんやりと覚醒した。

意識はある。だけどまぶたが本当に重い。

今の時間はざっと5時半だろう。10分くらいなら床の上でダラダラしても無茶は効く。

「……うう」

けだるい体を、誰かがつつく。

「……わかった、……わかった起きるからピノ」

そうやって私は使い魔の頭をくしゃくしゃに撫でながら自分を立ち上げた。

「はあ……」

私はあくびみたいなため息をついてしまった。

体も文句なしに良好、天気も憎たらしい程にいい。学校には行きたくない訳では無い……つていうのは少しばかり嘘になる。

「だけど、まあこれのせいかな」

右手に謎のアザができているからだ。

線上のが手の甲に3つ。やや左右対称だけど、その形は少し歪。

……否、謎では無い。もう正体は知れている。

令呪だ。令呪の兆し。それが現れてしまった。私は聖杯戦争のマスター……とやらに選ばれてしまったのだ。

これができるかこれこれ7日経つ

「どうしたものかね……」

このあざについては、調べる内に二つ驚かされた。まず一つ目は、これが聖杯戦争っていう、騒々しいモノの参加権のようなものであり、その際に召喚される使い魔「サーヴァント」に対する命令権であったこと。

繰り返すが、マスターの資格を得た、ということになるのだ。

聖杯戦争は7騎のサーヴァントが殺し合い、最後の1騎になるまで戦う。

文字通りの戦争。と言つてもでかい規模の戦争では無い、そのサーヴァントと契約を結んでいる「マスター」同士の争いである。

まあいわば白羽の矢がたってしまったのだ。

2つ目は、この聖杯戦争自体が、もう既に開催することがありえないものであること。

10年以上も前にどうやら、聖杯戦争が起こっていたところで聖杯をぶんどる魔術師と解体する人達がドンパチ起こしたらしい。

… ドンパチレベルのもんじゃあないが。

それでも… 私の生活は変わらない。というか、より前に進んだ。

「よし、やるぞ。材料は揃った。今日でやるんだ。今日しかない」

… と、私は意気込んだものの

「…… フフフツ」

仰々しい独り言を吐いたのか、目の前にいる使い魔2匹の目が点になっっているのを見て我に返った。そしてそいつらのおかしさに少し笑ってしまった。

「まあごめんね。先に笑わせたのはウチだからね」

そう言つて2匹の首あたりを順番にくりくりとする。どっちも気持ちよさそうだ。

「うしつ。今日も頑張るか」

ピノ、ミケを片手ずつで抱えてリビングに向かう。

「おはよう。ボス、タロウ。早速だけど… 朝ご飯の手伝いをしてくれないかい？」

使い魔2匹に朝の挨拶をする。こっちは自分の部屋に向かわなかったヤツら。飼い主である自分の命令を待っていたのだろう。

「ピノ、ミケは洗濯物を干しておいて。それが終わったら、朝ごはんができるまで待つておいてね」

2匹は、なー、とかくるる、とか言いながら布、服、毛布、その他諸々を干していく。小動物が口で啣えて連携が取れているような、それでいてちよこまかとうごく仕草は朝の癒しになる。… まあ少し扱いが乱暴なのが玉に瑕だが、

「おーい、できたぞお」

朝食、弁当の分の料理がやっと出来上がったので食事にありつく。使い魔達には、特製のドッグフード的なのを各々の皿に適量入れて済ます。

「どうしたボス、…ごめんね。今月はちよつとピンチなんだ。聖杯ぶんどつたら鱈腹食わせてやるからね。お前達の中で一番図体でかいのはお前なんだから、ほら、心もでかくなりな」

申し訳なさそうに私はいう。それでもボスは悲しい顔をしていた。色々な、簡単な身支度を済ませ、登校する。

「それじゃあ行くよ。絶対に暴れないでね」

全員元気な返事をした。いつもの事だが、これなら安全そうだ。扉を閉め、外に出る。

ここで、魔術を取り扱ってるお家の一仕事

「…ッー」

はい。これで終わり。端的に言うとは結界を張った。一般人の目につかないようにする程度だけど。

言い忘れてたけど、私、ししど穴戸 みお濔尾は魔術師の家だ。でも魔術なんか大それたことはできない。

どちらかと言うとキメラ作りの家系だ。動物と動物を合わせて別の生き物にするという、傍から見たら倫理感が欠如したような事をコソコソとやっている。

母は私という一人娘が生まれてから、父の正体を知って卒倒、後に父が追い出したらしく、父は「時計塔へ行く」と書き置きを残したまま帰ってこない。二人とも子供をなんだと思ってるんだか。

~~~~~

しばらくして、学校に着く。

「おはよー濔尾」

「ああ、おはよう」

いつもと変わらない朝。けどこれから少しだけ、これが少なくなっていくのかと思うと、少し頬辺りにピリピリと、緊張感と表した方がいいのだろうかこれは

「…………… 澤尾、どうしたの？怖い顔して」

「あっ!?えっ、あっ…… ちよつと変な夢見てさ」

「何の夢？」

クソツ、咄嗟についた嘘がさらに墓穴を掘る結果になってしまった。めんどくせえ

「ああ…………… なんだったかなあ。ウチがペットと、知らない人と一緒に…………… 悪いヤツらをぶっ飛ばす…… 夢だった気がする」

とんでもない捏造である。しかもこれが後に起こることだとはこの友人も知る由もなからう。

「…… ふーん。で？」

「で？」

「うん。で？なんかこれだけじゃ漫画の1話だけ読んだ感じでつままないんだけど」

なんだよコイツ。普通『ふーん』ってのは興味無い時に言う台詞と相場が決まっているだろうが。私は精一杯の誤魔化し笑いをするが、多分やばい感じに引きつってるかもしれない。

「ア、アハハ…………… そのあとは忘れちゃったカナア…… ああっ! そういえばあ! 部活の用事があるんだったあ! ごめん! 先急ぐね!」

「あっ! …… ねえちよつと待ってよ!」

颯爽と、自分が意識してる中で最優の演技をして、私は部室に入る。

「ぶはアーツ! 振り切ったぜ……!」

息を切らしながらもガッツポーズ。上を向いて、親指を天井に突き上げる。

と、教室4分の1の大きさくらいの部室をキョロキョロする。そして横を見ると、床に座ってる一人の少女の姿が。

「…… 見ちゃった？」

黒い髪のポニーテール、高校二年生には見えない顔の幼さ、そして身長の小きさはぶかぶかの制服と長めのスカートが喋らずとも物語っている。

間違いない。 颯 かんなぎ 楓花 ふうか。私の1番の親友であり私が所属して

いる登山部の部長だ。



少女は、うん。と声を発しながら首を下に傾けた。いやあ我ながら顔が本当に熱い

「…まあいいや。ってか楓花、もしかして毎朝そこにいるの？」

また、うん の声。

「だって、朝早く来たたら誰もいないんだもん、机が行儀よく並んでるだけでき、殺風景だよ。」

「…じゃあもつと遅く来ればいいだろ。」

私はすぐそこにあつた椅子に足を掛けて座りながらため息混じりに吐いた。

「…」

…アレ？地雷に触れちゃった？

「そうだよ！それすごく最強！そしたらもつと寝れるし一石二鳥だそれ！」

ガバッと起き上がって急にハイテンションになった。喜んでるならよかった。

「なら明日から快適な眠りを…」

「あーでも私やっぱり人が喋ってるのあんまり好きじゃないし、遅く来ても結局部屋かなー」

と、顎あたりに人差し指を当てる。優柔不断だなオイ

「それに…明日はホラ私達登山部作つてからの初めての活動！眠れるわけじゃないじゃん！」

あー… そうだった。それがあつた。

「だからアレは結局、海側のホテルに泊まる仲良し会レベルのもんでしょ？部費使つたら生徒会やらにぶち殺されるよ？」

「まあまあ、T G I Fでござるよ瀧尾殿お…今日を乗り越えられれば明日は休日！これ以上最強なことつてないよね！」

ハイテンションだなあ。と自分はため息をついた

そんなこんなで朝の予鈴が鳴る。

「…おっ、そろそろだな。じゃあうちは行くよ」

「うん」

私はカバンを背負い、2年4組に向かう。

教室に入るや否や、クラスメイトは机を囲んでそれぞれの話をしていた。

「…でさー… そうそう、んでねー…」

「いやまじで… だから…」

そんなこんなで席につくと、先程の友人が話しかけてきた。

「みお〜」

「うおっ!?何さ」

あまりの急さにビツクリした。先程、私が撒いた友人だ。不覚にも、死角をつかれてしまったようだ

「あー… 夢の話ならきれいさっぱり忘れちゃったから話せないよ？」

「いや、そうじゃなくてさ…」

何かきな臭い顔をしている。

「ココ最近さあ… ボロボロの馬に乗って、変なヨロイ?のコスプレしてるジーサンがウロウロしては目が合った人に話しかけて来るらしくてさ…」

はあ。としか言えなかった。エンカウントも急なら振ってくる話も急なのか

「誰かのウソでしょ? エイプリルフルじゃないんだよ今日は」

「ホントだよ! クラスの他の人も見たし…」

信じられない。ただの噂だろう。と、思ったが、もしかするともしかするかもしれない。

「何話しているかわかんなかったし、終わったと思っただらどっか行つたし… 訳わかんなかった。」

「… ふーん。まあ気いつけとくわ」

~~~~~

「… 以上が今日の連絡だ。各自気をつけて帰るように」
いつものHRが終わった。担任のけだるそうな連絡も、いつもと変わらない。

私は席を立とうとした

「あつ… まだあつたわ。すまんすまん。お前から着席イ」

生徒からの総ブーイング。自分も大事な用事があるので正直今には少しイラツときた。

『最近、この辺りの人が失踪する事件が多発しています。生徒はいつも以上に警戒して、己の身を守る行動をとってください』……だそうだ。あんまり1人でほつつき歩くなよー」

なんだよー、と、ザワつくが、中には噂のあのジジイじゃね？と話をするヤツも。

と、まあそんなこんなで学校が終わった。私はすぐさまカバンを持ち上げここからの任務を遂行する。

「降り立つ風には壁を……四方の門は通じ……これ結構難しいな……」

メモに書かれた文とにらめっこし、その文をそらでブツブツ唱えながら歩いていった。なんでも英霊を召喚するための詠唱らしい。

台座の役割を果たす魔法陣、喚び寄せるための詠唱、喚び出す際に英霊を絞って召喚出来る触媒を用意する必要があるらしいが、

文献によると触媒に至っては用意しているマスターとそうでも無いマスターがいるらしく、詠唱の有無に関わらず英霊が召喚される事例があるらしいのでよくはわからない。

「三叉路は……巡回……！あー違ったのかよなんだよ循環って」

暗記科目が苦手なのがここで響く。召喚詠唱を考えた人を呪う一方で、こればかりは才能なのか、と溜息をつきながらそれでもメモに書かれてある嫌になるほど長い文と格闘する。

「物事の初めこそちゃんと言なきや。あとこれだけ……これだけ揃えば」

真っ赤に染まる夕陽は、いつもの夕日に見えて何か別物の風景を見ているようだと感じた。

「夜遅く、正確に言う……11時頃。キメラたちは完全に寝て、ちよつとの騒音でも主人である私が命令するまで起きないようにしてある。」

私は、地下の物置にいた

「ふう……やつとこの時が、来たか……」

魔法陣を書くためのキメラの血を、健康管理という建前であの子達にチュウチュウ吸い取っていた罪悪感もこれで終わり。

でも予備の分も用意された大量の赤い液体を見ると、それはぶり返してくる。

「…ッ！　　やんなきゃ。もう採っちゃったんだもの」

私はケースに血液を入れると、それを万年筆にカポツ、とねじ込み魔法陣を描いていく

「ええと…？　消去…　退去…　退去、これをあと三つ、か」

消去、退去、退去と繰り返していき、そして遂に魔法陣は完成した。

「よし…！　行くよっ…！」

はるか遠くにある、古代の物とされている鎖。私はそれを陣の傍らに置く。これを手に入れるのかなり苦労した。ありとあらゆるところを探して、この歳に見合わないような大きすぎる買い物をしてやっと手に入れたのだ。今更疑おうが、おいそれと気を変えられるものじゃない

「スウツ…」

大きく深呼吸をして…　痣のある右手をかざして…

素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。　四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る

三叉路は循環せよ

いい感じ。絶対に間違えてない、という自信がある。

閉じよ。　閉じよ。　閉じよ。　閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

赤かっただけの魔法陣が白く光った。行ける。しかし気を抜いてはダメだ。ここからが本番　だんだん強くなっていく風のためか、右腕を左手で支えるようにして掴んだ。

——　告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

よしっ…！　よしっ…！　と思わず心の中で叫んでいた。

光っていたものがさらに光り、ものすごい風を巻き起こしている。目をつぶつちやダメだ、と私は直感でそう思った。今まで張った糸が、全部途切れてしまうような確信がそこにあつたからだ。誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！

激しい衝撃の後、ホコリのせいでその男を認識できたのは幾秒経つてからだった。

そうしてシルクハットを被った、胡散臭そうな姿をした男は、右手に持っている杖をクルクルさせ私にこう告げた。

「サーヴァント、キャスター。ン召喚に応じ馳せ参じ致しました……見ましたところ……貴方がマスターのようですね。」

第2話 誰がために幕は開く

ぼつちりと目が覚めた。今日は多分、というかすごくいい日なのだろう。ガバツと布団を裏返して起きた。

花の女子高生、颯 楓花の朝は最強に速いので颯爽と洗面所へと行った。顔を洗い、髪をとかし…。毎日やり慣れている朝の支度を、鏡とお見合いしながらやる。

支度を済ますと、食卓にはもうほかほかの朝ごはんがあった。

「作っておいたよ。さっさと食べて学校へ行きな」

「ありがとう！じいちゃん」

「おうさ…。よいしょつと」

じいちゃんはそういうと、家の外へ出ていった。じいちゃんの日課である神社の掃除をしに行くのだろう。

颯家は祖父、父、母、そしてこの私の4人構成なのだが、お父さんとお母さんは遠いところで仕事をしており、実質じいちゃんと私の2人構成だ。

私のじいちゃん、颯 賀嵐は海谷神社の神主。

2年前に、この海谷市に神社を建立するという話がじいちゃんに回ってきたらしく、ちょうど神主を探していた、というのでここに移り住んだ。親2人は何故か自分だけをじいちゃんと一緒に住まわせたのだ。

理由は今になってもわからない。

「…ごちそうさまー！」

両手をパチン、と合わせ軽い足取りで食器をキッチンの方へ持っていく。今日もじいちゃんのご飯は美味しかった。

カバンを下げ玄関へ向かう。そして戸を引き私は空を見た。思っている通りだ。最強の快晴。

「…？」

私は、そんなことを気にせず学校へ向かった。

くくくく

教室に入ると、そこは机と椅子が碁盤のように並んでる暗室だった。時刻は7時前。どうやら自分がイチバンだったようだ。

こういう時間はふと声に出してしまうほど静かなのである

「なんか寂しいなあ。」

私は踵を返し、いつもの部室へと向かった。

ガチャ、とドアを開け、テーブルの上にカバンを乗つけた。

椅子に座るのはなんだか落ち着かないため、壁に持たれて体育座りをした。

そういえば、今日は随分変な夢をみた。

変な、怖い大人の人に追っかけられて、怖かったからずーっと逃げた。

逃げて、逃げて、逃げて、逃げて、それで追いつかれそうになった時に……

誰かが守ってくれた、って言うよりそれは「隠した」、とか「遮った」って言うのがあたりかもしれない。

実際、それで怖い人はこつちに来なくなっただけけれど、その向こうには大切な人がいた…… ような気がした。

それで多分、急に私は大きい声を出したんだと思う。

「ぶはアーツ！振り切ったぜ……！」

そう、この漣尾ちゃんのように。

必死な女の子はキョロキョロ辺りを見回すと、やっとこつちの存在に気づいたらしい。

息を切らしていたのか、顔が非常に赤かった。

「……見ちゃった？」

自分は首を縦に振った。

宍戸 漣尾。 自分と同級生で入学当初からの親友であり私が取り仕切っている登山部の部長。

ほんのちよっぴりオレンジがかかった茶色のセミロングをしていて、キリツとした顔立ち。身長は自分よりちよっぴり大きい。

そしてストラップの動物がヒジヨーにダサイ。

「……まあいいや。ってか楓花、もしかして毎朝そこにいるの？」

また首を縦に振りながら、今日の朝のハイライトをば。

「だって、朝早く来たら誰もいないんだもん、机が行儀よく並んでるだけだし、殺風景だよ」

「…じゃあもつと遅く来ればいいだろ？」

その時、この楓花さんに電流が走った。何とあなたはそれほど天才なのだろうか。

「そうだよ…それすごく最強！そしたらもつと寝れるし一石二鳥だそれ！」

逆転の発想というやつだ。盲点だった。

「なら明日から快適な眠りを…」

「あーでも私やっぱり人が喋ってるのあんまり好きじゃないし、遅く来ても結局部屋かなー」

そう。私は最強故にあまりパンピーと交わらないのである。

「それに…明日はホラ私達登山部作ってからの初めての活動！眠れるわけないじゃん！」

実は、我々登山部は入部からこれっぽっちも登山部らしい活動をしていないのである。

そこで！部長であるこの私が立案した『ドキッ！丸ごと登山 J Kだけの外出大会（ホテルもあるヨ！）』を今週末に遂行する。予算も学校が出すらしいのでオールオッケー。

「だからアレは結局、海側のホテルに泊まる仲良し会レベルのもんでしょ？部費使ったら生徒会やらにぶち殺されるよ？」

「まあまあ、T G I Fでござるよ瀧尾殿お…今日を乗り越えられれば明日は休日！これ以上最強なことってないよね！」

なんて、わんやわんや話してたら予鈴が鳴った。

「…おっ、そろそろだな。じゃあうちは行くよ」

そう言つて瀧尾が退室する前に、自分は妙なものを見た。

瀧、なんで夏なのにセーター着てるんだらう。

「うん」

学校では週末のことで頭がいっぱいで楽しかったことは一つもなかった。しかし今日の夕陽はとてもキレイで最強だった。


~~~~~

翌日。

今日の空は少し曇っていた。なんだか危ない模様をしている。

私は早く朝食を済ませ、一応山のピクニックの装備は整えてから待ち合わせ場所に向かった。

滯尾は大丈夫だろうか、昨日電話をかけたのだが一切出てこなかった。まあ今日の朝連絡が来なかったし休みということはないだろう。

「ふあああ… おはよ。楓花」

後ろから声がした。振り返ると、いつもの滯尾が。

否、いつもの、では無い。右腕に骨折した時につけるやつを着ける。あれなんて言うんだろうな？

……ではなくて、一大事だ。

「ええ!? 滯尾… それどーしたの」

「ああ… うちペット飼ってんだけど、そいつが暴れて右腕を噛んじゃってさ。んで夜救急で応急処置してもらった… ごめんね? あの時ホンツトに痛くて、電話も出られなかったんだ」

怪我人は首を下げて、すまない。というふうに左手を立たせた。

ふむ… これはすごく最強じゃない。

「そっか…」

「ああ… しばらくそれで休むからさ… なるべく楓花には…」

「じゃあ今日はホテルだけだね」

すると、滯尾はきよんとした。

「…………… え?」

「なんで? 山は天気悪そうだし怪我したら危ないけど、ホテルは安全だし休めるじゃん。行こーよ」

「え… でも怪我が…」

「ダイジョーブダイジョーブ! 最強の楓花さんがいればこんな包帯、日が暮れたら包帯の方から逃げ出すって!」

それにせっかく待ち合わせまでしたのだから、ここでホテルに行かないというわけにはいかないのだ。

「ほらー！」

「… あっ!!」

すかさず濡尾の左手を掴んで私は目的地へひた走った

くくくく

「… ンで、わざわざ手え引つ張つてまで連れてきたこのホテル…」

いやあ… まさかね

自分も、今気づいた。そんなシステムがあらうとは…。

「… 予約してないだつて？」

濡尾がすごく怖い。怖い。

「どうするの？…ここアブロードビレッジだよ？週末だし観光客で絶対空いてないって…！」

私たちが住んでいるこの『海谷市』という場所は、住宅街である『高瀬』と、観光用の『谷城』という2つのエリアに大きく別れている。

その谷城は、アブロードビレッジという外国人向けの小さな街、とかシヨップینگモールとか色々な店がずらあつと並んでるすごいところを有しているのだ。

んでそのアブロードビレッジの、最高級のホテル、『ロワール・リゾート』に泊まろう！、つて言うのがこの靦楓花の魂胆であったのだが…。

「だ、大丈夫だよ… 今から受付をすれば間に合うかもだし…？」

「まあこれでチェックイン出来なかつたら帰るよ？腕本当に痛いし。」

濡尾、マジで怒ってる。もしかして本当に悪いことしちゃったのかな…。

「とりあえず… 濡尾はここで待ってて。私チェックインしてくる…！」

私はホテルに入り、ロビーへ全力でダッシュした。

そして…

「申し訳ございませんが…ただいま空き部屋がございません。またの機会をお待ちしております。」

と、受付のお姉さんに愛想笑いで拒絶された。魂が抜ける感覚を今まさに体感する。

私は意気消沈しながら、下を向いたまま濡尾に敗北宣言をしに行く。

と、その時であった。

ドツ、と何かにぶつかつた。急なことだったので私は思わずよろけ、そして転んでしまった。

「あつ…すみません大丈夫で…」

上を見上げると何やら眼鏡をかけた男の人がこつちを見下ろしている。髪の色は紫だが先っぽは金髪のようにも見える。どちらが地か分からない。

「ああ…大丈夫ですか。」

「ええ。こつちは大丈夫…イツ…！」

何か右手に痛みを感じた。ぶつかつた時に打ってしまったのだろうか。

「…？」

男はこちらを振り向いた。

すると目を見開いたが早いか驚いた様子で、手のひらを返すように態度を変えた。

「こつ…この度は誠に申し訳ございません！女性に傷をつけてしまふなんて…ああなんてことを…!!その…お詫びといえばなんですが、私このホテルのオーナーでございます…もしよろしければ、ここでしばし休まれてはいかがでしょうか？部屋は無論、こちらで手配致します！」

男は矢継ぎ早に話す。展開がはやすぎる。

「ああ…いや、でも二人…」

「2名様でいらつしやつたのですか？構いませんよ！お客様の怪我を治すためでございますしたら、私十人であろうが百人であろうが部屋を手配致しますとも！ささつ、どうぞこちらへ」

えーと…これ、泊まれるってことでいいんだよね。だとしたら  
濡尾を呼ばなくちゃ。

「あ…ありがとうございます！…とりあえずもう一人を呼んで  
きますね」

そう言つて立ち上がり、すれ違う瞬間。

『手続き』はお早めに、我々が全てご用意致します故。」

男はわけのわからないことを言った。

はてな、チェックインはこつちでやれ。ということなのだろうか。

「は…」

振り向くと、もうあの人たちはロビーにはいなかった。

そのあとはすぐ濡尾を呼んで受付に行った。だけどどうやら  
チェックインはすんでるらしかった。

~~~~~

部屋は2人で泊まるにはとても広く、なんでもVIP待遇で、ふ
つーの部屋3つ分の大きさのヤツを手配してくれたらしい。いやは
や、僥倖僥倖。

テレビは2つ、ベッドもダブルサイズのが2つ。

これだけでもすごいのだが一般の家庭のリビングにありそうな
テーブルが、室内の中央にどんと置かれてある。きつとスペースを埋
めるためのものだろう。

窓は10mくらい長く、ここから海谷市の武器である青いビーチと
観光街の夜景を欲張りして眺められる。

「ねー…みてー…すごいキレイー！夜景だよ夜景」

「……」

濡尾はまだ不貞腐れている。

「ね、ねえ…さっきはごめんね？ 私、予約知らなかったし…でも

！ほら、なんやかんやあってこんなすごい部屋に入れたんだしき！」

濡尾は、下を向いたままスつと立ち上がると、如何にも「話しかけ
ないでください」と背中を語るように部屋へ出ていった。

…… あーあ、濡尾を本当に怒らせてしまったみたいだ。
今日は本当に最悪の日だ。全っ然最強じゃない。

本当は今の時間は濡尾と一緒に豪華なビュッフェなるものでも食べに行こうとしていたのだ。

天気はすぐれないし濡尾は体調不良だし計画は頓挫しかけたし……。

それに、あの男の人とぶつかった時にできた痣、なのだろうか？

あの男の人とぶつかった時にできた痣、なのだろうか、

痣といえば線状にできているし、かと言って蚯蚓脹れといえば言うほど腫れていない。

「なんなんだろうこれ……」

右手の甲を天井にかざし、それをまじまじと見つめる。

よく見たら何か模様っぽいし、触っても叩いても痛くない。

…… お腹がすいた。　　そういえば今日てんてこ舞いでこれといったご飯を食べていなかったんだった。

なんとあのホテルの人、お食事券までつけているのだから本当にありがたい。

「二人で行くか……」

私は食事券を握って、部屋の玄関へと足を向ける。

その時、つけてあった髪留めが落ちた。

「あ」

ただ髪留めが落ちただけだ。私はそれに手を伸ばそうとした。

すると、信じられないことが起こった。

ほわぁん、と床に「模様」が浮かんだ。

それは丸く、なんやらおとぎ話に出てきそうないわば「魔法陣」っぽいもの。

そしてそれが白く光る。

「ッ……！！」

その「模様」から風が少しづつ、強くなって吹いている。私がここから部屋を抜け出そうと思った時にはもう手遅れになるほど、その風は強くなっていった。

「ちよつと待って…… 何これ……！」

私は立つのがやつとだった。何が起きているのかわかんない。でも、私でもわかることがある。

この後に何かがある、と……。

「——っ！」

魔法陣は急に爆弾のように、眩しいほどに光って、衝撃波が同時に来た。

そして、10秒ほど

—そこには大男が一人、目を瞑ったまま正面に胡座をかいていた。

私は立ち尽くしたままだった。物理的で、精神的な衝撃のそれは晴天の霹靂、というものだろう。

男は目をカツと開き、私の方を見ると、腰につけてある剣を抜き、ヒュッ、と私を指してこういった。

「…… おめえが俺の『マスター』ってやつか？随分、飄々としてるじゃねえか」

同時に、ドアの方からガチャリ、と開いた先には先程部屋を出た瀧尾が……。

…… やはり今日何かツイてない気がする。

先程の風でカーテンが開いていたのか、窓からの光は、自分と瀧尾の方を照らしていた。

第3話 フーカ・イン・マジックランド

夜。それは反省の時間。自らの未熟さを呪い、明日に活かすための時間。そう普段は……

今日は違う。

1つ、2つ、3つとピースが揃うこの感覚はインストールの進捗画面を見るに等しいくらいに精神の高揚が収まらない。しかし後一歩で止まるといふ歯痒さもそれに近い。

何日も、待ち続けた。刹那、瞬き一つするその瞬間でさえ其れに煩わずにいることは無かった。

ついに揃ったのだ、7つのピースが……その時が訪れたのだ……！

「……全騎……全騎揃ったアツ！」

アサシン！ランサー！ライダー！バーサーカー！キャスター！

アーチャー！そして！そしてそしてそして！セイバアアツ！！！！

霊器盤を食い入るように見つめる。やはり7つツ！7騎全て捉えているツ！

確認した！もう少なくとも50回は確認した！

「これにて幕は開いたぞオツ！あとは祈るだけだ！そう、祈るだけ……」

そう、ただ一つ、腹立たしい点がある。

祈らなければならぬのだ。

『前々回まで』の失敗は俺の責任だ……不完全だった複製！不出来な改良！そしてそれらが引き起こすエラー！

これらの原因は俺にある。俺によって引き起こされた事故、起こるべくして起こった想定外ツ！、必然のアクシデント！そう！！『前々回まで』は、だ！！

だが

『前回』は違う！コピーの粗が見つかるたびそれを直した！改良による不具合が起これば取り除いた！

そうやって全ての失敗をカバーしたのが『前回』だ！確実に成功するはずだったのだ！！否、『はず』ではない！！あんなことが起きなければ

確実に成功していた!!!

計画を突き詰め全てを完璧に整えた上で実行した『前回』! そんな俺の期待と努力を嘲笑うかのように起こった『不確定事項』!! 複数の運や気まぐれが絡み合った末にはじき出された『失敗』!!!

「今度こそ... 今度こそだッ!!」

そう今度こそ——

ん? 誰かいないか? とりあえずふりむく。

「... なんだ、お前か。ずいぶんと早いな」

居たのはアサシンのマスター。用件はわかっている。注文の『品』を取りに来たんだろう。

「ええ... 時間ピッタリのはずですが。」

そんなバカな。手首に目をやる。10時。なるほど、時間通りだ。察した。

「そうか、すまない... ほんとにコイツだけでいいのか?」

注文された『品』をだしながら、話を進める。

「ああ、これがあれば大丈夫だ... 注文通りの品、確かに受け取った。聖杯戦争が始まり次第働かせてもらいます。依頼通りに」

「それはありがたい。じゃあ今すぐ働いてくれ。ついさつきセイバーが召喚されたんでね」

そう、ついに召喚されたのだ。思わず笑みがこぼれてしまった。

「... なるほど。おめでとうございます。では、早速——」

「ああ待てもう一つ。」

はい? と言いたそうな顔をよそ目に続ける。

「聖杯戦争が始まってしまった以上表立っての協力はできない。仮に命の危機だろうと決して助けはしない... わかっているな?」

彼は一言で返事をすまずとブツを持って退室した。

その向こうは何故か、暗かったような明るかったような気がした。

くくくく

状況 が 全く 読み込めない。

「うっし。パスは繋がったみてえだな」

訳の分からない出方をした訳の分からない大きい人が、訳の分から

ないことを言ってる。

とにかく、大きい。あとは髪がモサモサしてたり、どこか昔の人の格好をしているくらい

目は鋭く、顔は少し怖い。

「そう、パスは繋がった、が、」

そう言って彼は後ろを振り向くと

「あの、シマに勝手に入っている虫二匹を祓えばいいんだよなあ……！」

男が剣で指した先は濡尾。まさか、この人濡尾を殺すっていうの？

「楓花…… そうだったんだね。」

「!?」

濡尾がすごい怖い顔してこちらを見る。

「強引に連れて行って、それで場を整えてこちらを殺す……」

殺すって……

「いやちよつと待つ……」

「祓ってやらアツ！」

私がセリフを言い終える前に、男は濡尾の首を狙う。

しかし、その太刀筋は濡尾の首をはねるかわりに金属音を響かせて止まった。

「状況を見てお話で済むかと傍観を決め込んでいたのですが、いの一
番で突撃とは、いやはや。あなた、バーサーカーでは？」

サーカスにいるような格好をしたお兄さんが突如『なんもない所』
から頭れて、男の剣を杖で受けていた。

両者とも、距離が近すぎるのか一旦ある程度の間隔を置いた。

「ほう、そのナリっちゃあ…… テメーはキヤスターだな。」

「ご名答にございます。少しは話を通じる分、バーサーカーの線は薄
れた、と言いましようか。」

一連の会話といい、連続するありえない現象といい、今の私にとつ
て一番大切なのは「説明」であった。

「おい！醜女エ！さつきと指示を出せ！」

急に大声を出してきた。こっちのセリフだよ 私は何をすればい

いの？

奥には瀟尾の顔が見える。怖いけど、怒っているような顔ではない。それよりもっと、もう3段階踏み込んだような顔をしている。

白い剣と黒の杖の応酬。人の目では追う事ができない。それだけで人の業では無いことがわかった。

「早く！指示を寄越しやがれ！醜女エ！」

男の怒号はどんどん大きくなる。

「おやあ？仲間割れにございますか。」

「ちっ——」

目の前で手品師風の人と戦っていた男は、急にこちらに踵を返し、私を抱え、窓へ向かい、

「歯ア食いしばれよ、醜女」

ベランダから飛び降りた。

刹那の出来事であった。

「え」

これ 私 死ぬ？

「うわああああああああ!!」

地面が迫る。ものすごい勢い。私は目をぎゆうつと目を瞑る
どおっ、と音がした

目はちゃんと見えたので大丈夫っぽい 意識も普通に——

「っしや行くぞオ！」

と確認をする前に益荒男はどこかへ走った。しかも速い。自動車くらいにスピード出ているんじゃないかっていうほど

ふとして、森のようなどころに入ったところで毛むくじやら男は立ち止まり、木のところで私を下ろした。

「いてっ」

しかも乱暴に

「ここまで来れば、余裕はあるか」

男は木にもたれ、ため息をつく

そういえばここまで一切の説明無しだ。まずこいつの名前を聞かないと

「あつ！あの！」

「？」

「あんたの名前って何？」

「ああ…？俺か…俺は…いや、『セイバー』って呼んでくれ」

セイバー…日本人、少なくともアジアの人間とは思えない名前である。

「『セイバー』…？バカにしてるの？最強じゃないよ全然。あんたの名前じゃないでしょ。」

「はーん…『名前』と聞くあたり、お前本当に何も知らなさそうだな。」

セイバーが妙なことを言い出す。

「…まあそうだよ。私全然知らない。さっきの円くてブワァーつてするやつとか、なんか手品師みたいなお兄さんとか、なんで濡尾が人殺しみたいな顔してたのか」

今までの不安がどつと流れたのか、大きな声で早口になる。

「端的に言うぜ。お前、『とんでもなくやべー事』に巻き込まれたみてえだな。」

やはりそうか、理解はできなかったが、感覚で分かっていた。

で、知りたいのはその後だ。WhatもWhyもHowも何もかも。

「…まあ、わかったけど、もうちよつと詳しく教えてくれない？」

「まあ、そうだな、あのさっきの胡散臭えやつがあと少なくとも—」

するとセイバーは急に剣を抜き、後ろに飛び込んだ。それを目で追うよりも先に鋭い音が響く。

「俺を含めて7人はいるな。」

振り向くと、さっきのお兄さんが。そして濡尾もいる。

「いやはや…結構イケると思っていたんですが。」

「キヤスター、止まらないで。ここで一気に仕留めるよ。」

濡尾やばいよ。最強なほどの殺意。

「ねえ濡尾？その…無理やり連れていったことは謝るよ。ごめん。だから一旦止まる？」

瀧尾は睨んだまま無視してキャスター？っていう人に指示を送る。「キャスター、セイバーのマスターを無力化して。セイバーとの交戦はできるだけ避けて」

するとキャスターの視線は私の方に向く。それを阻むかのようにセイバーはキャスターの方に向かっていった。

立て続けに繰り出されるキャスターの連撃を、セイバーは剣一本で全部凌いでいる。

「醜女エ…！早く指示を寄越せ！」

「わ、私を守って…！」

私は咄嗟にこういう指示しかできなかった。そしてなんとか瀧尾の方へ向か—

えっ

誰かに突かれたのだ。脇腹を抉られたように何かで突かれただけ。一瞬の出来事だけど、私にはそれが感覚的にわかった

だけどそのあとは吹っ飛ばされて、木の方にぶつかった。完全に事態を把握したのはその時だった

「—かはっ」

どん と衝撃が体中全体につたわる。

どうしよう、体が重い。

そして、そこにはまた違う人の声が、

「ああ？生きてやがったか。」

顔と毛深さはまんま猿のそれで、手には赤い棒、頭には金色の飾りのようなものが巻かれている。

「そ… 孫悟空!？」

私は思わずその言葉を口にしてしまった。

横腹の痛みよりも、居るはずの無いモノが存在しているのだ。

「ご存知じゃねえかア!!いかにオレサマが斉天大聖にして花果山の猿王、ランサー、『孫悟空』様よオ！」

孫悟空は威勢のいい口上を言ってみ得を切った。

「これ、孫、無闇に真名を名乗るのでない。モタモタしとらんかったら、あの小姐の息の根を止めれただろうに。」

初老くらいの、白髪がやや混じったおじいさんが孫悟空(?)のところへ歩み寄る。

「こんくらいは多めに見てくれよ。さつきアサシン捻ったろ?」
「!？」

孫悟空のセリフに、瀟尾は驚愕したようだった。

「…………… キャスター、退却。」

「ええ！御意にございます！」

瀟尾とキャスターは森からさあつと消えていった。

「オレらも行くぞー！」

セイバーはそう言うと、私を肩に載つけて豪快な速さで森から抜けた。

「おい醜女、さっさとお前の拠点を教えろ。」

「—ああ…………… うん」

あたりはすっかり夜。月は半分よりちよつと欠け気味。

あんなに派手に突かれた脇腹は痛かった。痛かったけど、何だか少し切なさが勝っていた。

第4話

サーヴァントは召喚主の運命を見るか？

「そのミオってやつが、キャスターのマスターで、お前のダチなんだな？」

「うん。だからその、仲直りしたいなあって……」

セイバーは私の部屋の中でくつろぎながら訊いていた。

私とセイバーは、キャスター、「孫悟空」ことランサーとか言うヤツらと戦って……防御一辺倒だったけど機を見て撤退した。

今は私の家の中でとりあえず作戦会議、というか尋問を行っている。もちろん私が尋ねられる側だ。

「んで、あれだ。お前の名前、まだ聞いてねえよな。」

一瞬はつとなつたが、なんだか「はいそうですか」と教えるのも癪に障る。

「それよりセイバーの本当の名前を教えてよ。あるんでしょ？本当の名前。」

「いいやこつちから先だ。お前の名前を知っておかねえとこの先ずっと醜女呼ばわりするぞ。」

間髪入れずに返された。シコメっていう単語の意味がわからなかったけど、なにか蔑称っぽい感じだと思ったので渋々名乗ることにする。

「……楓花。颯 楓花」

「よし、じゃあ話を続けるぞ楓花。」

「はい」

改めてセイバーがこつちを向いて胡座をかいた。

「すまんが、俺の本当の名前は教えられねえ。」

急に約束を反故にしゃがった

「なんで？」

彼はすぐに返す

「隠す方が強いからにきまってるんだろ。」

謎が謎を呼ぶ

「なんで？」

また彼は返す

「……じゃあ、順を追って話すぜ。」

「……セイバーの目はより真剣になった」

「お前が巻き込まれた……のか参加したのかは現時点わかんねえが、今お前は『聖杯戦争』つつうかなりやべえ催しの中にいる。それはわかるか？」

急にわからない単語が飛んできた

「えっ……なにそれ、知らない」

「……」

セイバーは一瞬、絶句した。けど

「……分かった。『まず』の場所が違ったみてえだな」

セイバーは改めてこちらを向く

「まず、聖杯戦争についてだが、戦争と言っても国同士のでつかい争いじゃねえ。7人の魔術師が聖杯つてのを奪い合うタチの悪い喧嘩だ。さっきも言ったが、お前はそれに巻き込まれている」

「うん」

セイバーは続ける。

「でだ。どこのだれが考えたが知らねえが、マジユツシってのはどうにも陰険らしく、自分で胸張って戦わずに『サーヴァント』っていう……まあ俺みたいなやつを呼び出して戦う。そのサーヴァントが7騎召喚されて、最後の1騎になるまで殺しあうことになる。」

「へ、へえ……」

私は、あほみたいな顔になっていながら頷いているだろう。このおじさんの話していることが、あまりにも嘘っぽすぎるし壮大すぎる。だけど、私は「召喚される」光景をその目で見たのだ。そして現にそれが目の前にいる。

「頭の整理はついたか？」

「うん。続けて」

「まあ、俺はこうやって召喚されたわけだが、さっき言った、サーヴァントを戦わせる魔術師のことを『マスター』って言ってな、それがお前だ。」

「なるほど・・・なる・・・ほど?」

「まあ・・・そうなるよな。」

セイバーはため息をつきながら私の右手を掴んだ

「わっ」

「お前の手の甲を見る。」

気が付けば赤いタトゥーのようなものが。自分でもこんな書いた覚えはない

「これは令呪って言って、お前のサーヴァントに三回だけ命令をすることが出来る。まあ簡単に言や、これが、お前が俺のマスターである証であり、これがなくなったら俺とお前の主従関係は終わる。」

愚問はしなかった。その言葉の重みというか、主従関係ってヤツが切れたらどうなるかっていうのを、私の勘で分かったような気がした。多分相当ヤバイになるんだろう。

とりあえずこのオジサンが私の家来みたいな人であるということと、セイハイセンソウでこの家来みたいなのが私や濠尾他5人の命令でバトルロワイヤルまがいなことをされるといのが分かった。

「大体のことは分かったか?」

セイバーは念を押すように聞いた

「うん」

「よし。じゃあ次の話だ。」

「ここから先は、楓花。お前自身の問題だ。」

急に部屋の空気が変わった。

「選べ。」

急な質問である。

「選べ・・・って何を?」

鋭い目をしたセイバーは続ける。

「俺だつて外道じゃねえ。何も知らなかったお前を聖杯戦争から無理矢理引きずりおろして切捨御免たあ、筋が通らねえ話だ。」

「楓花。聖杯戦争に参加するか。マスターの座を降りて俺と契約を切るか、どっちかを選べ。」

厳かで、強い眼差しでこちらをにらむ。

これは分岐点だ。多分、この後の私の決断によつては私は死ぬかもしれない。

と、迷っているうちに、濡尾のことを思い出した。

「・・・質問、いいかな。」

「おう」

「もし、私が参加したら、濡尾はどうしてくると思う？」

「ああ、さつき話したアイツか。」

表情を変えず。セイバーは告げた。

「わかんねえが・・・お前のことを殺しに来るんじゃないやねえか？お前とソイツはダチなんだろう？でも俺が召喚されてた時は・・・ミオだったか？まあたまげてやがったぜ。」

私ははつとした

「今まで仲良ししてきたやつがいきなりだまし討ちまがいのことするんだぜ。人によっちゃあ考えることもあるかもしれないが・・・俺だつたらすぐ殺してるな。」

確かに。と私は思った。まだ悩む。私はもう一つ質問をした。

「・・・じゃあ、私が参加しなかったら・・・どうなるかな」

少し間をおいて、セイバーは告げた。

「多分、お前の目の前から姿を消すだろうな。おそらく、二度と会えねえぜ。」

私はその言葉でまたハツとなった。

彼は続ける

「正直、俺アどつちでもいいぜ。ほかのマスターに頭一つ下がりや済む話だからよ。だから、これはお前の選択だ。」

濡尾はどう思ってるんだろ。怒ってるのかな。それとも、私のことなんかどうでもよくて、今は勝利のためにサーヴァントと作戦を立てているのかもしれない。

でも・・・
だめだもん。

―決めた。

「私、戦うよ。濡尾と絶対に、仲直りするもん。」

「それに・・・」

今考えれば、わたしは濔尾に対していろんなことをした
だから

「謝らなきゃ。」

わたしはセイバーの前で誓った。

「いいよ、セイバー。今日から、私は貴方の、マスターになる……
！」

こうして、私と濔尾との物語は始まって行ったのである

~~~~~

ありえない。予想外だ。

……認識の範囲内だけど

海谷での魔術師の家は、私、穴戸と街のはずれにある麻霧おぎりくらいだ。  
ここら一帯で力のある魔術師の家なんて麻霧くらいしか聞いたこ  
とがないし、他の魔術師が引越してきた。なんて事はココ最近聞い  
ていないし(そもそも魔術師という存在自体世間に知られていないの  
だけど)

ありえないのだ。なんで、なんで、どうして、

——あ楓いつがマスターなの？

「よろしいですか？マスター。」

急にキャスターの声が聞こえた

「うわあっ!?!」

正直かなり心臓にク。人が考えてる時に、死角から出てくるの  
だ。怖い。

「……びつくりしたあ。」

安堵のため息。そしてイライラがこみ上げるけど面倒くさいので  
其れは引っ込める。

胡散臭い葦のような男は話を切り出す

「話、よろしいですか？」

「何？」

「あのサーヴァントのマスター、面識がおありで？」  
すさまじい単刀直入ぶりである。

「……まあ、そうだったよ。正直今はわかんない」

キャスターは何か気づいたようだった

「その様子ですと、あなたの『友人』が魔術師であったことに気づかなかったってヤツですか」

私はこくりと首を縦に振る。

「いやはやーそれはまあさぞ辛きにございますねー」

このキャスター、どうやら口ぶりにかなり癖があるらしい。すこし癪に障る

「前から思ってたんだけどさ、そのしゃべり方どーにかなんないの」

「私のしゃべり方、にございますか?」

そうすると彼はいかにも申し訳なさそうな顔をした

「いやはやー!・・・こればかりはどうしようもありません故、正直言うところにはさがというやつでございまして、令呪などで縛るのならお好きにどうぞ?しかしそうされましたら私がどうなるか私にも予測しかねます。真名濁し、としてご容赦いただければよろしいのではないのでしょうか?・・・しかし、私は不可能を可能にする男にございますれば・・・いやはやー普通の口調にでも戻せるのではないでしょうか!?!」

知るかよ

「・・・わかった、じゃあそれはいいよ。」

次はキャスターが話を吹っかけてきた

「で、どうされるんですか?ご友人は。」

「もう敵だよ。倒すし、必要になったらもう殺す。」

「はあ、左様にございますか」

「そうだよ。」

口調もあってか、悠長なキャスターにさらにイライラする。

「私、少し思う所がございまして、」

「何」

「彼女、本当に裏切ったんでしよつかね。」

「はあ?」

と同時に、私の知らない何かがこみ上げてきた。

「何故って?普通の魔術師であれば、あんなところで召喚致します?」

友人がいらっしやる、発見されやすい、ほぼアウェイである場所。私だったら致しませんよ？現にマスターが私をお呼びなされた場所も、自宅の工房ではなかったじゃないですか。いやまあ！私魔術師ではないのでそんなこと微塵も分かりはしませんかね！えええ！」

「キヤスター。」

「戯言にございます。此度の戦といえど、いやはや、ユーモアのユの字くらいは理解してくれる主の下に呼ばれたと思っっていたのです  
が・・・」

私はキヤスターに必要な以上に反応してしまった。

詐欺師なのかサーカス師なのかわからない男の顔は青ざめている。気が付くとひよろひよろした胡散臭い男は張り付いたように壁に立っていた。

私は相当感情的になって詰め寄ったらしい。

「は、はは。これはこれは・・・。大変失礼いたしました・・・」

顔をひきつらせながら

「そうだ！マスター、コーヒーなんてどうです？話もひと段落ついたところにございますし、ええ！私が淹れますとも。なにより召喚されてやりたいことリストの中に『おいしいコーヒーを淹れる。』とありました故に。せつかくにございます。さき、リラックスイたしましょう？台所はあちらにございますよね？」

「いやはや、という言葉を連呼しながら彼は一目散に台所へ向かった。」

はあ、と私はため息をついた。

でも、これである程度吹っ切れた、というものだ

最も、あつちが、あのサーヴァントを手放さなかったらの話だけど。

その時は――

「いい度胸じゃん。ぶっ潰してあげるよ」

~~~~~

召喚されたときはかなり驚いた。

が、一目でわかった。英霊とは、僕たち人間とは違う、まさに幻想の具現化であるのだと。

—成功してから、僕はこのサーヴァントとはまず会話をした。

最初はたどたどしかったものの、時間がたつてしまえば僕とすんなり喋ることができた。

次に行ったことは観察だ。僕はライダーに、「待機」を命じた。下手に動くよりも、戦況を見てから動いたほうが賢明だ。

幸いにもライダーは静かな性格だった故か、ちゃんと聞いてくれた。

—観察と会話の結果、ライダーは神性を持っているらしい。

それに、携えた兵装、ライダー特有の機動力。

僕が得た確信は一つ。この聖杯戦争は僕の勝利で確定した。ということだ。

しかし、油断をしてはいけない。まだ動くべき時ではない。

潰しあつて減つていったところを、確実に狙う。

そう、僕とライダーなら、きつと

「失礼します。」

ノックの音がしたので、僕はノートを閉じた。

「どうした？」

ぼくはふと窓を見た。どうやらもう夜らしい。

彼女はドアを開けた。

「コーヒーを届けに参りました。」

「気が利くじゃないか。ああいや、やはり紅茶にしてくれ。僕はもう寝たいのでね。」

はい、と彼女は言うのと代わりにすぐ紅茶を差し出した。

「そう言うと思っておりました。」

「ますます気が利くね！いやあ、気分がいいね！此度の聖杯戦争は勝利同然だし、いいところにあつい飲み物が来る。そもそも、聖杯戦争が開催されたのも僕にとってジャストミートだったんだ。いやあ、かなりついてるね。」

「ええ、」

白いカップに赤く透明な液体が注がれていく。その時間さえ優雅に感じられるほどに僕は悦に浸っていた。

「それにしても。あのクソジジイの間抜けツ面、本当に最高だった。あれは芸術だね。岡本太郎がいったら？『芸術は爆発だ。』って、僕にしてみれば、あの一瞬こそ爆発でそれでこそ美しい芸術だった。」僕は紅茶をあつという間に喉に突っ込んだ。

「せいせいしたよーもう僕を邪魔する奴はいないし、それに、ライダーなら全部ぶっ潰せる！まだ出陣もしていないが。僕は大いに期待している。」

「・・・失礼しました。」

用が終わったのか、彼女は部屋から出て行った。

僕は周到だ。この海谷一帯に、使い魔をばらまいておいた。

どうやら今夜、3騎が遭遇して戦闘。その戦闘の前にも1騎の反応が薄くなるのが観測できた。瀕死になったか、退去したかのどちらかだろう

もう少しだ。馬鹿どもはさっさとやられて、僕とライダーの踏み台になる準備をしてくれ。

今宵は気分がいい。

僕は笑った。この勝利を喜ぶために、敗者たちの前座を馬鹿にするために。

部屋中いっぱい、大きく嗤った。

この聖杯戦争、麻霧斗真が聖杯をいただく。

第5話 オカルティアン・ラプソディ

僕、ダレン・スペクターは世界一ヘンな運命を持つ男であるという自信がある。

小学校、中学、高校は普通に、なんの荒事もなく過ごした。というのもこれは僕が小さいとき、僕の先生から教えられた「約束」を常に信条として生きてきたからだ。

高校を卒業してから、僕は軍に入隊することに決めた。特にすることがなかったのと、いろんな経験を積んでおけば自ずと得られるものもあるだろう、と判断したためである。

しかし、僕はここで地獄を見ることになる。

元々やせぎすな体形で体育会系のようなコミュニティが僕の性に合わなかったのだ。

今思えば、あの判断はかなり僕の人生にとって悪手だったといえる。

それから、あまり詳しい期間は覚えていないけど、すぐに除隊した。

数えきれないほどのパワハラ、モラハラ、

・・・それにセクハラだつてされた。さすがに僕は自分のケツを掘られに軍に入ったわけじゃない。

除隊してからはすぐに雇ってもらえる会社を探し、職に就いた。・・・だけどネクラな性格が祟ったのか、上司や同僚とすぐトラブルを起こした。

結局なんやかんやあつて会社はクビ。 次の会社を探した。

次の会社はかなり居心地がよかった。自分と同類が比較的多かったからだ。この時同僚に勧められ、小さい頃は気味悪がってたオカルトにはまる。僕が22歳の時だ。

しかし、僕にとってビルが立ち並ぶストリートというのはかなりストレスだった。いや、人と人の関係というのが億劫だ。というのが正しい。

僕はまた会社を辞めた。その時はちゃんと友人である同僚も別れを惜しんでくれたし、今も彼らとはたびたびパーティをする。

僕は西部の田舎に移り住んだ。とても静かで人との関わりも最小限に抑えられる。ここで自給自足の生活を送ることに決めた。

そして、そこそこ集まってきたオカルト仲間たちとレスをしてる時に、僕の運命は変わった。

なんでも、「極東の小さい島に小規模で魔術的なゴタゴタが起こっているらしい」というのをオカルトスレで見つけたからだ。

このことはレスをあさっている僕やオカルト仲間の間で有名になった。情報源が現地であるのと、レス主の正体が特定できない、他にも興味心をくすぐるような要素がありまくってた。

僕自身、外出のけだるさよりも興味のほうが勝ってしまった。

幸か不幸か、僕以外に暇な奴はいなかったらしい。ならばこれは僕だけで独り占めするでしょう。と、海谷^{ウナダニ}へと赴いたのである。

着弾してからは、海谷のはずれにある、手ごろな家を借りた。日本の家はウサギ小屋なんて話をきいたし、ただでさえ小さいのにマンションやアパートだったら息苦しくて死にそうだと僕は踏んだ。

それから、あれこれとオカルトグッズを家において、生活の足回りも用意した。

観光ついでに、海谷の心霊的なもの、今回の「ゴタゴタ」に関係がありそうなものを隅から隅まで調べまくった。

そして、現在に至る。

「はあ……」

海谷に到着してから三日目。パソコン右下の端にあるカレンダーは「Friday」の文字。こんなにか経ったのに、こんなに進まない。完全に手詰まりである。正直、自然を離れてここまで歩いてきたのは社会人時代以来だ。

あのレス主の正体もここに来たのに掴めない。もう少しなんだ。けどそのもう少しに僕はたどり着けない。

そういえば、と

僕はまだ整理されていないダンボールを漁った。

「…… あった。これか」

それは、1冊のボロボロな本だった。引越しをする前、実家に行っ

てオカルティックな道具を探していたらこれが見つかったのだ。

親父やお袋に聞いてもその存在、出自は謎らしい。

ただ親父は『その本を余所者に渡してはならない』とだけ聞いたことがある。』という情報を口にした。

僕はなんとなくその本をめくろうとしたが、

「こんな破れやすい本、素手で触ったらやばいだろうな・・・」

と、今度は白い手袋をはめ、ピンセットを以て開帳する。

開くと、ほぼ内容は虫に食われていたが、端的に言うところこれは当りだ。

「聖・・・戦争の・・・容を・・・」

僕はすぐさまノートPCを開いた。本に書かれていることで怪しいやつを見つけたらすぐさま検索。これを繰り返し返していった。

が、ほとんどそれに類するものは出てこなかった

しかし、それでこそこの書の信憑性が増してくるというものだ。

「いいぞ・・・いい・・・でもまだ大ダネがないな・・・」

そして、僕は本に書かれている奇妙なものを目にした。

「なんだ？この紋章・・・」

その隣のページには「召喚」とうっすら書かれているらしい文章が載っていた。

「これ、もしかして・・・」

間違いない。大方予想はついた。つまり

「悪魔の召喚書だ！昔、悪魔召喚の儀式が起こるときに、僕のご先祖様はこのことを記していたわけだ！」

と、あれこれ推測や解説が一気に進まった。点と点が線になる、とはこういうことを指すのだろうか。

いや、そうに違いない

ここで大きな難関が一つ

召喚のためには生き物の血が必要だと分かった。

「まいったな・・・」

自分の血を・・・と思ったが陣を組むのに必要な血を想定するとかなり血の気が引いた。

「どうしたものか・・・」

と、窓へ目をやるとそこには、にやあと鳴く小動物が。
「!?」

野良猫と30分の格闘をして捕獲は成功した。

「日本は銃禁止だから・・・持っていたら一発で仕留められたのになあ・・・」

と、ぼくはナイフでその猫に切り傷をいれながら、ドクドクと流れる赤い液体を瓶で集める。

「うげえっ」

勢いでやってみたはいいものの、実際かなりグロテスクだ。血が流れるのは何回見ても僕は耐性の付くものじゃあなかった。

「ごめんよ。ちよいとばかり、頂戴するだけだ。おわつたら治療してやるからな。」

第一関門はこれにて潜り抜けた

結構血をとったが大丈夫だろうか、と心配しながら僕は猫に応急処置をした。

軍での訓練の中で、真面目にやった数少ないことが応急処置でよかったと思っている。

本来は人を想定しての救命だけど・・・まあ要所要所には手当てしたから大丈夫だろう。

猫は意識が朦朧としていながらも、息はあった。引つ掻こうとするあたり野良猫のしぶとさを、しみじみと感じさせられる。

僕は猫に栄養剤をうった。これも猫ちゃん用じゃないけど、まあ大事はない。そう思いたい。

早速僕はそので血で本の書いてある通りに魔方陣を描いた。

この紋様自体の意味は分からないが、何か精密なしくみがこの陣の中に仕組まれてあるのだろう。

「ふう・・・描いたぞー！」

作業がひと段落ついたので、ここで休憩をする。僕は手を後ろについて海谷の空を見た。

— 思えば、今日はかなり幸運が続いたものだ。

といつても、本来の目的にそれではいけないかと懸念はしたものの、まあ興味を満たすものはできたしそれで十分だろう

その時だ。

「^{ouch}イツー！」

右手のほうに瞬間的だけど強烈な痛みを感じた。

まさか猫が起き上がって反撃でもしたのかと猫のほうを見る。

しかし、ヤツはまだ眠ったままだった。

「・・・？」

僕は次に、痛みのした右手の甲を見た。

すると、赤いロゴのようで、それでいて不気味なサインのようなの。がくつきりと表れている。

「えっ・・・えっ・・・！」

あり得ないことは次々と起こる。

描いた魔方陣がバチバチ、と音を立てて光を発している。そしてその光とバチバチはどんどんと強くなっていく！

その光は暗くなることを知らない。さらに召喚陣の周りを風が吹きまくっていた。

すごい。すごい。すごい！来るぞ！

—そして、

正面から急に懐中電灯を点けられたかのように、僕の視界は白一色となった。

目を開ける。すると、髪を結った、白い衣をまとっている人影がそこに立っており、さっきの僕のように空を見ていた。

やがてソイツは僕の存在に気づき、気圧されてすくんでいる僕のほうへ近づき、こう尋ねた。

「君が、私のマスターかい？」

・・・マス、ター？

とりあえず、落ち着こうと悪魔(?)を椅子に座らせ、仔細を話した。

「はぁ・・・そういうことか。」

とりあえず大方話は聞いた。聖杯戦争から、令呪やら英霊やら…それらの情報は僕にとつて垂涎ものだった。

「これで理解したかい？」

むこう側に座っている、悪魔と思つてたものはかなり板についた様子で僕の淹れたコーヒーをすすっている。

「苦ッ!!」

そして床に黒いソレをぶちまけた。

「…なんだ。この苦いのは。何だ？私をサーヴァントだと見くびっているのか？ええ？」

「ああいや、そんな気はないんだ。待つてくれよ。すぐ床を拭くからさ。」

気を取り直して

「今度は大丈夫だろうね？」

「ああ。さつきはすまん…苦いのはびっくりするよな。そこにシロップを用意した。…ああ、苦いのを和らげるやつね。好きだけ入れて、そばに置いてあるマドラーでちゃんとかき混ぜてから飲んでくれ」

そうすると彼女（いや、彼なのか？とにかく中性的な見た目だが、今は「彼女」と考えよう。）は、気難しい顔をして、シロップを1個2個…7個入れてコーヒーをすすった。

「ふむ」

今度は平気らしい。

「で、だ。」

彼女は話を切り出した。

「契約するか、契約しないか。選びたまえ。君にはそれを選択する権利はある。」

そんなの、決まってるじゃないか。

「そりゃあ、僕は参加するよ。せつかく出不精のオカルトマニアがここまで来たんだ。こうなったら、趣味に生きて、趣味に死んでやるもさ。」

さて、次にやることと言ったら…

これも決定事項だ。

「ん？ダレン。何をするつもりだ。」

「何って、今起こった出来事をスレでぶち込んでやるのさ。こんな面白いこと隠しておけるわけがないだろ？」

こうして僕が「投稿」の文字を押そうとした瞬間。

「あれ・・・」

いや、キーを押そうとしているけど、キーが近いようで遠い。動いているようで動いてないみたいだ。

「今君は、とてつもなく軽率な行動をしているということに気が付かないのかい？」

僕はすぐさま彼女のほうを見た。

「だから私が止めた。いいか、話を聞け。」

「!？」

これが、この英霊の力なのか？

「よせよ。僕の邪魔をするのはとても頭にくるぜ。確か令呪って契約しているサーヴァントに命令できるんだったな？君がこれを解かないのなら僕だってやり方が——」

「今、君が向こう見ずな行動で君の一連の努力の成果を見せびらかすでしょう。考えてみる。これは戦争なんだぞ？敵はどこにいるかわからない。今だって、君と同じ状況にあるかもしれない。」

「それに」

雄弁はまだ止まらない

「私が今この体で土を踏んでいられるのは、隠し続けないといけない技術によって成り立っているからだ。魔術とは、そういうルールなんだ。こればかりは魔術を作ったやつに言ってくれ。令呪でやるのなら大いに結構、君がたった3画しかない貴重な強制命令権を使ってほしいのならどうぞそうしたまえ、私は君のためを思って忠告しているのだぞ？イギリスに『好奇心は猫を殺す』ということわざがあるようだが、使い方に多少の差異は有れど今の君にはそれが一番お似合いだとも。」

「だからやめたまえ」

彼女は続けた。

「魔術はね。『神秘』であるからこそ魔術なんだ。隠すことに意味があるのさ・・・明かしてしまつたら？それは科学がその仕事と置き換わることになる。君がばらさなければ魔術は魔術でいられる。好きなコンテンツが生き続けるのだよ？今を重視するか、未来を重視するか、だ。ダレン・スペクター。」

「・・・わかった。そこまで筋が通されちゃあ僕も返す言葉がないよ」
僕はパソコンをぱたんと閉じた。

「賢明な判断だ。」

そしてすぐ彼女は言う。

「この忠告はこれっきりにしておいてくれ。これ以降君が『利敵行為』ともみれる言動をした場合、私は君を見捨てるからな。」

「オーケイ・・・」

この英霊がどれだけ聖杯戦争に固執しているのが分かった。

そういえば

「ああ、そうだ。君の真名を教えてくださいませんか？今話せないんだつたら、せめてどのクラスなのかくらいは知りたい。」

彼女はさつきとは打って変わって冷静な態度で返した。

「そうだな。自己紹介がまだだった。今回はアーチャークラスで現界した。私の真名は――」

~~~~~

最強の女子高生、颯 楓花の朝は早い。

朝起きて、支度をして、下に降りて、朝食をとり、玄関をくぐって、さあ学校へ！レッツゴー！

まさにいつもの日常である。いやー！日常っていいなー！ビバ平穩日和！

「おい、マスター。」

そしてその日常はただちに崩れ去つたのである。

「なあに、セイバー。」

「おまえ、どこ行くんだよ。」

「え、学校だけど。」

セイバーはため息をつく。

「な、何よ？別に学校行つたつていいでしょ？」

「ガツコウ、つてたしかお前みたいな年のやつらが集まる場所だろ？それならずいぶんと人が多いところに行くつうことじゃねえか。」

「その何が悪いの？」

「右手の甲を見ろ。忘れたのか？」

あつそうだ。

まあ急にこんな赤くてくつきりした痣誰かに見られたらそりやあ怪しがられるよね。

「あ、あははあ・・・こりやあ失礼いたしました。」

「いくつうんならよ。何か羽織れ。ないよりマシだろ。」

セイバーに言われて、私はすぐセーターを出した。

そういや、学校行かないつて選択肢もあるのか・・・

いや、学校は行くもんだし、なんか今行かなくなったら明日また休みそうだし。

それに、濡尾がいるかもしれないし。

「おはよー。」

「・・・でさー。聞いたー？」

「えーまじ?!」

いつもの喧騒が続く中、私は教室へ行かずに部室へ行つた。

ドアを開け、そこらへんにかばんを置き、椅子に座らずに壁にもたれかかって体育すわり。

いつも始業前からこうしているが、今日はなんだかいつそうこうしていたくなる。

「濡尾・・・」

昼休み、濡尾のクラスの担任に呼ばれた。

「覗 楓花さんか・・・」

国語の教師の川藤 大村先生。たまーに臨時で私のクラスの古文を教えたりする。

「穴戸のことなんだが、欠席届が出ていないまま休んでるんだ。お前、穴戸と同じ登山部だろ？何かあつたのか？週末は活動を行つたつて

聞いたぞ。」

「あつ、それなんですけど・・・」

私と喧嘩して休みました。なんて言えない。いったところで、だよ  
ね

「濡尾、右腕ねん挫したらしくて・・・、しばらく休むそうです。」

「はあ・・・」

川藤先生は微妙な反応である。

「まあ分かった。体調不良、っていうことだな？わかった。わざわざ呼び出して、すまないな。」

「はい。失礼します」

結局、今日は濡尾を見ることはなかった。

下校中、急にセイバーが現れて話を切り出した。

「おい。」

「わっ」

「どうすんだよ、濡尾とかいうやつ。」

「てかセイバー急に消えたり出てきたり何してたの？」

「ずつとお前の近くにいたが。」

「ええ!？」

私は驚いた。コイツうそをついているんじゃないか。いや、日中君  
見なかったよ？

「ああ、俺たちサーヴァントはな、霊体化っていったら、簡単にいや幽  
霊みたいな状態になることができる。その間は斬る殴るとかの物理  
的な攻撃が効かねえし、魔力の消費も抑えられる。」

「ええ、それ最強じゃん。」

「まあこつちからも攻撃できねえんだけどな。そんなうまい話はねえ  
んだなこれが」

「あつそうなの・・・」

セイバーが話を戻す。

「でだ。キャスターのマスター、どーすんだよ。」

「うーん・・・」

私はセイバーに思っていることを告げた。



「私ね、滯尾と仲直りしたいの。・・・仲直りじゃなくても、今まで私がやってきたこと全部謝りたいなあ、って。」

「そうしたら、もし殺しあう関係になっても、後悔せずに済むだろうか。・・・」

私は今日の学校の時間を振り返った。友人がいないだけでも、こんなにも心に穴が開くのかとしみじみと感じられる。

「いや、殺すわけじゃないよ？殺すわけじゃないけど・・・滯尾は今はまだ敵みたくないもんだし、怒ってるし・・・」

他にも言いたいことはあるのに、なぜかここで詰まってしまう。胸いっぱいになっているんだらうか。

「・・・なあマスター。一つ方法がある。」

「何、セイバー」

「アイツと仲直りする方法だ。」

私はセイバーからの提案を聞いた。

「・・・」

「これだけだ。おまえができて、俺が納得する方法だけ、ただ欠点もありありだけだよ。」

「いいね！その提案、ものすごく最強！そうと決まればすぐ行動ッ！行くよ！セイバー！」

作戦決行。準備は万端。装備はセイバー一人で十分。まあ滯尾がいなかったらそこまでだけど・・・

「準備はいい？セイバー」

「ああ、ただよ、相手はキャスターだ。どんなもん仕掛けてくるかわからねえからな。」

「へーきへーき！最強だもん！滯尾にごめんなさいして、今日のやることはこれでおしまい！」

私は深呼吸をした。そして

「いぎー・滯尾の家へ！」

私はかつて、そしてこれからも友であってほしい人の前に立って

る。  
私が今から押すであろうピンポンは運命が変わる音でもあるのか  
もしれない。

## 第6話 二人主屋敷の契

午前8時、宍戸濡尾は起床した。

もつとも、午前8時であると気づいたのは時計を見てからであり、咄嗟に学校の支度をする。

が、あることを思いつくと私はそれをすぐやめた。

「……今日はさぼりでいいや。」

私をずつと起こしていたのだろうか、ピノはわたしが仕度をやめたのを少し不審がっていた。

「ピノ……今日は学校休みなんだ。今日はお前たちと十分遊べる日だよ?。」

ピノはくるる?と首をかしげるが、ピノを手に乗せている私はこのくくと両翼をすこしなでる程度で、くしゃくしゃにしてごまかす。

頭が犬の猫、ミケ。

二足歩行するワニ、タロウ。

「ドラゴン」を再現しようとしたキメラ、ボス。

そして足が六本ある鳥、(正確な種類はモズだったつけ……)のピノ。

この子たちが、私が小さいときに作ったキメラであり、私が気に入り、またあの子たちも私を気に入ってくれた、いわば魔術師にとって貴重な、お互い心を通わせた友人である。

いまでは性能を重視した合成獣の作成が専らだが、この子達に関しては私の愛を注いだ。といっても過言ではないくらいに

私の家には私と、今紹介した四匹の友人くらいしかいない。

「ソマスターアツ!おはようございます!不肖キヤスター、少しでもお役に立てられればと思い、ブ레이크ファストをご用意いたしました!ささ、種も仕掛けものうございます故、冷めないうちにお召し上がりくださいませ!」

いや、このうるさい英霊とあわせて6人である。

重い瞼をこすりながら洗面所に向かう手前、テーブルを見た。本当に朝食が用意されている、使い魔の分十分によそってあり内心、

ちよつと感心した。

食卓の前には、カリツカリのトーストの上に、脂でテカテカしているベーコンを下敷きにしてプルンプルンの目玉焼きが乗っていた。ベーコンエッグ、というやつか。

普通にうまそうなのが余計癪に障る。

「・・・まあ、いただきます。」

ふいに、目玉焼きを食べるときの癖なのか私は、ベーコンエッグの上に醤油をかけてしまった。

これにはキャスターも驚いたらしい。

「いやはやー！マスター。さすがは日本人、といったところでしょうか。・・・しかしそこにソイソースをかけるのは少し似合わないのでは？」

ここで引けばよかったものを、私は変な意地を張ってしまった。

「・・・べ、ベーコンエッグは私はこういう食べ方なの！キャスターも騙されたと思っかけて食ってみれば？お、おいしすぎて悶絶するよ？」

覚悟を持って口に入れた

普通にうまかった。

「あっそうだ。キャスター。あんたの真名さ、まだ聞いていないけどどの英霊なの？」

私の真似をして醤油ベーコンエッグをほおぼってるキャスターはこちらのほうを見た。

「私の真名、にぎぎいますか。」

のこりのベーコンと目玉焼きを飲み込むと、彼は信じられない言葉を口にした。

「んー、今は教えられませんね。」

「はあ？」

あまりにも軽いノリだったので声が出してしまった。

「いやはや、二度もマスターの支持を無視するのはいささか許されざ

る行為ではございます。私がそうしたい。ただそれだけなのです。」  
はあ、ものすごく面倒くさい。

「なんでそんなに喋りたかないのさ。」

今度は、キャスターは伏し目がちに心の内を明かす

「ご友人と対峙したとき、ランサーが乱入いたしましたでしょう？彼の真名、孫悟空にございますよ？これではまず名前の時点で負けにございます。ええ。しかし！私の宝具はそれをも超える、空前絶後の大演目にございます故！その幕が開いたときにこそ演者である私が輝くというものですとも。」

らちが明かない。令呪で無理やり言わせようと思ったが・・・こんなことに令呪は切つてられないし。

・・・まあ教えてくれないならこつちから看破してやろう。

そんなこんなでピノやミケたちと遊んでたり、家の警報装置などの点検をしていたら夕方になった。

その夕方の時だ。私の運命を大きく変えることになったのは

「・・・ッーこれはー！」

警報が鳴る。 外敵が来た。ということだ。

魔術師の工房にわざわざ立ち入るとは、変な奴だ。

変な奴・・・まさか

私はすぐ窓から外のほうを見た。

小さい身長にうちの高校の制服、それにポニーテール。

ああ、あいつだ。あいつがいる。 颯 楓花だ。

「昨日の友人にございますか。」

何気に一緒に覗いていたキャスターが話しかけてきた。

「うん。キャスター。こつちが指示を出すから、その指示通りに動いて。」

あの子たちにも戦闘態勢を取らせる

「ミケとボスは玄関近くで待機、敵が来たら応戦すること。タロウはキャスターと連携して行動して。」

と、この中で一番小さいミケがそのやる気を、私でもわかるようにふんすふんすと跳ね回っている

「うん．．．ピノは小さいから、私と一緒にね。」

ピノは一瞬固まりながらも、喜んで自分の肩の上に乗ってくれた。「よし．．．！キャスター、タロウと一緒に連携お願いね。家に仕組んである術式は言ったから、それに注意して迎撃して。」

「ふむ。」

キャスターは、なんだか考え事をしているようだ。

「どうかしたの？キャスター」

「いや、一つ質問してよろしいです？」

今までとは違うような真面目な顔だ。

「ええ、ただ一つ単純な質問にございます。先ほどの警報装置についてなんですけれども。あの装置、感知する範囲って外までです？」

「え、いや．．．この家の敷地内までだけど．．．」

「ふむ．．．だとしたらかなりまずい状況にありますね。」

すこし背筋が凍るような感覚を体験した。

想定外の連続である。こんなこと想像もしたくない。

「私の懸念が正しければ．．．」

そう話しているころには遅かった。

「ツッ・マスター！」

咄嗟に振り向いた。

すると目の前には髑髏の面をかぶり黒衣の布をまとった、死神のようなもの

来る

ふいにつぶってしまった目を、恐る恐る開けた

「間に合いましたか．．．彼には敬礼を。」

キャスターが防いでくれているが、ピノが目の前で倒れていた

「ピ．．．ノ．．．？」

「チツ．．．」

焦りからか、白面の向こうからは舌打ちが聞こえた。

「いやはや．．．気配遮断でこちらに近づき、殺しやすいマスターを襲撃、これにてキャスター陣営お粗末！という目論見にございますか。姿を消すのが得意な割には、ずいぶんと見透かされるものでございま

すねえ！アサシンさん？」

「・・・っ！」

そうか。この見た目、確かに過去の記録にあった。

七つあるサーヴアントのクラスの一つである、隠密行動や気配遮断などでかく乱をするクラス、『暗殺者』<sup>アサシン</sup>がいると

私はそれより、頭の中がピノでいっぱい、刺客の分析もこれで精いっぱいだった。

「・・・見透かしたところで何になる。」

アサシンは大きく後ろに跳躍し、間を取って仕切り直しをした。

キャスターのおかげで、何とか隙からの強襲は防げた。

が、惜しい友をなくしてしまった。

せめてピノの遺体を、アサシンも撃退しなければならぬし、ピノも取り戻さなければならぬ

目の前にピノはいるのだ。

しかし、うかつに出てしまつては瞬で首を搔っ切られる。

相手は人の形をした影法師だ。私がいとも相手している合成獣

とはかなりわけが違う。

アサシンはあざ笑うかたちで啖呵を切る。

「貴様、キャスターと抜かしたな？笑わせる。手の内を自ら見せる阿呆に言われる筋合いはない。」

「阿呆で結構！地の利に甘んじてこそ驕れるというもの。私が今キャスターであると明かした所で、あなた、虎穴に自ら入ってしまった。と冷や汗かいたほうがよろしいのではないでしょうか？」

「ッ！」

キャスターが用意したのか、床から音を立てて、大きい爆発が轟いた。

よほどの爆発だからか、濃い煙が立ち込めている。

「マスター。今のうちに仕切り直しを。今のはただのかんしゃく玉みたいなものにごさいますゆえ。」

キャスターが耳打ちをした。

あれでかんしゃく玉・・・まあキャスターの道具作成によるものだ

ろう。

いや、それよりもピノの死体だ。あの子をさがさなくては。

「マスター、早くー！」

「え、ああ、ああ、ピノ！ピノはー！」

襲撃に備えなくては、と同時に、ピノを探さなくては、と躍起になつてしまう。

これじゃあだめなのに、ああ、クソ。早く、一刻でも早く、あのアサシンが襲ってくる前に――

「――サーヴアントも阿呆なら、主も阿呆か。」

声が聞こえたころには、アサシンがもう目の前にいた。

「ここで潔く死ね」

ああ、せつかくここまで来たのに

ピノにも手が届かないなんて。

魔術師なのに、友達にまんまとだまされ、拳句の果てには使い魔を探そうとして手間どり殺されるなんて

あの馬鹿花とも、これつきりか。

もしかしたら、馬鹿なのは――

すると、

「!?」

アサシンが玄関の方向から何かに気づいたか、身軽に退いた。

すかさず私も、つられてそちらの方向をみる。

バキツと鈍く大きい音が鳴る。

ドン、と厚い板が倒れたような音がするやいなや

しいんと、静まり返ったこの空間に、大きな叫びが高らかに、玄関の先の居間まで響いた。

「たのもー！」

煙が晴れた瞬間、少女と偉丈夫のシルエツトが逆光で際立つ。

その隔っていたドアを蹴破った彼らの後ろの光の先には、私も照らし出されていた。

~~~~~


いよいよだ。いよいよ濡尾にごめんなさいできる。

「よし、行くよ。セイバー!」

「おう。」

そうやって敷地に入ろうとした瞬間、

「うわあっ!?!」

警報らしきものが鳴った。おそらく私たちが入ったから……?

「さすがは聖杯戦争参加してるだけあるね……。セキユリテイもすっかりしているんだね……」

急なサイレンでいままでの威勢がさらーっとくずれおちた。

「おい、何ぼさっとしてんだ。行くぞ」

「う、うん!そうだよね!」

気をとりなおして濡尾の家の門をくぐる。

それにしても妙だった。

いや、自分の気のせいかもしれないが、ふつう、警報装置とかそういうセキユリテイは侵入者が入ってから作動するものである

それなのに、作動したのは確か、自分が敷地に入る前だったはず……まあそれくらい用心深いということでしょう。

と、思ったその時であった。

今度は屋敷の中から大きな爆発音がした。

「え、濡尾……大丈夫かな……」

「ほう……」

セイバーは辛気臭い顔で言った。

「この気配は……サーヴァントがもう一騎いるな。」

それって、濡尾が戦ってるっていうことだよ

だめ。だめだよ。せつかく言いたいことがあるのに死んじやつたら。言えないじゃん。

「突っ込もう!セイバー!」

「ああ、こんな状況じゃノックもしてもらえねえな。ぶちかますぞ!準備はいいな!」

「うん!」

セイバーは足でドアを蹴り飛ばした。

その向こうには、煙に包まれた濡尾がいた。

私は再会をよろこぶ意味で、こう叫んでやったのさ

「たのもー!」

~~~~~

「わぁ・・・セイバー、もしかしてアレ?」

濡尾のすぐ向こうには骨のお面をかぶった気味悪い人がいる

ナイフとか物騒なもんもってるし。

「そうだな。おそらくあれで間違いねえだろ。」

その黒い人は私たちを見るや否や、

「チツ・・・厄介な輩が・・・!」

すぐさま逃げた。

「おや、いけませんよ? せっかくですから、まだびっくりしてもらいましよう!」

キャスターが叫ぶと、不思議なことが起こった。

キャスターが、黒い人にいたところに・・・?

いや、違う。

先ほどまでセイバーの目の前にいたはずのキャスターは確かにそつちに移動した。

その代わりに、

「何っ!?!」

黒い人がセイバーの目の前にいた。

「よっ。」

セイバーはとっさの移動で黒い人を気絶させる

さすがの黒い人も、あまりにも予想外な不意打ちには対処できなかったのか、あっさり倒れてしまった。

「・・・一回、お預けに致しません? 私、アサシンが気になりますので」

キャスターさんは親指で黒い人のほうをさしながら、目はどっかを向いてそう提案した。

「私が行く。」

二言目は言わなかったけど、「来るな。」っていうことだろう。そう言っていた気がした。

「ッ!？」

濡尾がすぐに後ずさりした。顔はかなり青ざめてる。

すぐさま私もその顔を覗いた。

見た途端、声じゃない声が出た。

いや本当に、びつくりするしかない。ええ、本当に……嘘でしょ？

黒くてボロボロとした衣に紛れていたが、衣の下に来ていたのはうちの学校の制服

つまり、私と同じ高校生ってことだ。

しかも、この子……

「濡尾……この子、濡尾んとこのクラスメイトだよ……」

濡尾は戻らない青ざめた顔を、ゆつくりと、縦に振った。

「とりあえず……」

濡尾はどこから出したか、何やら注射器を出すと、そのままその子の首に打った。

私はびつくりして声を出してしまった

「ちよ、濡尾!なにしてん……」

すると、瞬きの間に人を殺すような目がこつちに向くと注射器を私めがけて投げてきた

「うわあッ!」

私はとっさによけた。幸い当たらず、壁に注射器が勢いよく刺さる音がした。

「濡尾……」

濡尾はすぐこつちを睨みなおすと殺気立つようにこちらへ迫る。  
「帰って。」

怖気ついたけど、ここでは戻れやしない

「濡尾! 私、濡尾と仲直りしに来たの!仲直りっていうか、ほんとの

こととか、思っている事を話に来た。全部。」

濡尾の表情はかわらない。それどころかさつきより凶悪な何かが見えつつある。

「さつきと帰って。友達ごっこしてたよしみだから、今なら見逃してあげるよ」

私はおされて潰されそうな心をなんとか保たせて、できる限りぶちまける

「濡尾、聞いて。あの時は私にもわからなかったの。サーヴァントどころか、セイバーことも、そもそも聖杯戦争つていうのもわからなかったんだよ。」

「で？ それを話に来たところで何？ 私を殺さないでください？ それともこのデスゲームから抜ける方法を教えて？ ふざけないで。」

濡尾は持っていた空の注射器を落とすように捨てると、右手をこちらにかざしながらこう言った。

「忠告はこれで終わりだよ。」

なにやら、濡尾の右腕から紋様みたいなものが光るように浮かび上がる、令呪にしては多すぎるし、

私の勘はすぐさま、『危険』と判断した。こういう時に限って勘は当たる

(おい、やべえぞ。俺に早く指示を出せ。)

霊体化したセイバーも察知したのか、私に声をかけた

実体化しないのは、おそらく空気を読んでのことだろう

たしかに、このままだとかなりやばい 気がする。

けど

私はこっそり、『ダメ』のサインをだした。

(何やってんだ！死ぬぞお前)

死ぬのは怖いけど

ここでセイバーを出したら濡尾をさらに刺激してしまう。

時間の経過とともに濡尾の手から白い弾が現れ、大きくなってい

く。

怖い、すごく怖い、けど

それで滯尾がわかってくれるんだったら…

その方が最強だし

「いいよ。滯尾、私、何発でも受け止めるよ。」

自然とその言葉が口に出た。

どんな顔で言ったんだろう、滯尾のさつきまでの硬い表情がすぐに崩れたかと思うと、もつと怖くなった。

「吹き飛ばせ!!」

その大きい声とともに、私は滯尾のそれを<sup>弾</sup>モロに食らった。

ああ、生きてる。

でも 痛い

いたい。 けど

こらえなきや

「滯尾、ごめんね。」

意識が ふわふら するけど、なんとか いえた。

「……ッ!」

滯尾は まだ、撃つ構えをしている。

ああ、私 死—

「そこまでにございます。彼女、限りなくシロに近いシロだと思われるのですがね。」

キヤスター、さん?

滯尾はげんな顔でキヤスターに言い返す

「キヤスター。あなたまで何言ってるの?」

「すこし、冷静に……マスター? 種明かしの時間に参りましたよう! まず我々が初めて対峙したときからの話にございますが……」

身振りを大きくして、キヤスターさんは弁明を始めた

「彼女、一切指示を出しておりませんでしたよね? ああ……明確に申しますと、我々への攻撃はほとんどしてきませんでした。 攻撃といえます攻撃はすべてセイバーの意志によりますものと私は判断いた

しますよ。答え合わせをしたいのですが、如何でございましょう？」  
セイバーは霊体化を解き、話した。

「・・・ああ。この醜女、本当になんも言わなかった。目の前に敵がいやがるのにだぜ？ 事情を聴くまではこいつあ外れだな・・・ったあ薄々思つとつたわ。」

漣尾は少し固まりつつも、こう返す

「私が想定外の時間にきたんでしょ？ そもそも、あの部屋の誘導から色々臭すぎたんだよ。ホテルの支配人とグルだったんでしょ。」

「いやはや・・・それほどいたしますのならば自ら逃げるといった選択肢はとりますまい！ 『追い込んで、罠を使いまくっておさらば！』のほうがよく合理的にございますよ？」

「ああ・・・うん。・・・正直コイツ・・・アホだから」

少しだけ、納得したのかちよつぱり漣尾はすねたように口をとがらせてその言葉を吐いた

衝撃の言葉である。仲たがいはしたことよりも『アホ』って言われたことのほうが心にキテる・・・

「ええ！ お分かりになりましたか？ 彼女がなぜ我々を攻撃しなかったか！ まず彼女が仮に、魔術師にございました線をお話すると『彼女がそもそもアホだった』か『マスターが来る時間が想定外だった』、この二つに絞れます。加えまして・・・。」

魔術師じゃないしそもそもアホじゃないです。

そして、キャスターさんは漣尾に諭すようにこう言った。

「彼女が仮に、魔術師ではなかったら？ 『予想外の現象が起き、予想外に喧嘩をしてみたい、予想外に敵意を向けられてしまった。』こういう一線しか考えられません。魔術師であるとしたらすかさず！ ちよちよいのちよいつと攻撃いたしますし？ なにより、なによりでございませがさきほどのアサシン襲撃、セイバー陣営が何気なく派手に表れて何気なくアサシン（仮）を見事討伐いたしました。」

さらにとどめを刺すように

「拳句の果てには！ いやはや、アサシン（仮）を調べながらも我がマスターに何げなく近づきました！ 正直あの場面、彼女が魔術師で

あればすぐに殺せる距離でした。」

「それは、ミケやボスたちもいたし—」

キャスターさんは濡尾の言葉をさえぎるように続けた。

「あなたの使い魔も、セイバーほどのサーヴァントがお相手にございましたら一瞬でお生肉に変わってしまいましたよ?」

濡尾は目が開き、口から一瞬声が出なかった。

「そしてです!先ほどの口喧嘩! あなたも壮絶にございますねえマスター。話を聞かず対大型魔獣の魔弾を人にBAN! あの時は私もおしつこちびつちやいました。いやはや生きてて何よりでしたね。ああそうですね、お名前を聞いておりませんでした。レディ、お名前をうかがってよろしいでしょうか?」

キャスターは、ショーのMCみたいな口ぶりで今更私の名前を尋ねる。

「え、ああ...楓花、颯 楓花です...」

「カンナギフーカ! いいお名前にございます。...そうですね!ミス・カンナギ、セイバーを实体化させましたら、あの魔弾は防げたはずにございますよね? あえてお聞きいたしましたしよ!なぜセイバーを出さなかったのです?」

私はちよつと自嘲気味に笑いながら話した

「いやあ...あの時、セイバーを出したら、最強じゃないかなあつて...」

「いやはや、マスター?もうお判りでしょう。そう、結論から申し上げますと、ミス・カンナギは—」

ここまでの口上の流れの良さに思わず息をのんでしまう。

『聖杯戦争を知らない、一般人ですこし間の抜けたレディ』にございましょう。ええ!」

なんだろう、頼もしい仲間にフレンドリーファイアされたような気分だ。私はアホでもなければ間抜けでもないのに—

「キャスター...」

濡尾はすこし申し訳なさそうに下を向きながら口を開ける

「...うん、薄々、いやもうそうなんじゃないかなって思ってた。だつ

て楓花がアホじゃない魔術師だったらあんなことしないって……」  
漣尾は顔をくしゃくしゃにして、私に抱きつきながら言った。

「ごめんねえ……楓花。疑っちゃって……私、楓花のこと信じられなかった……本当の楓花は、少し抜けてるところがあつて……それ  
でまっすぐで、私をこうやって貶めることなんか絶対にしないつ  
て……だつて、あんなことがあつて……それでもう……」

一言多い気がするけど……まあいいや

「ううん。大丈夫だよ。漣尾。ちゃんとわかってくれて……こつち  
こそごめんね？ 今日、それが言いたかつたんだ。あと——」

私は漣尾の肩を両手でつかむと、漣尾と面向かうように手で抱き着  
いているのを離して、

「私をあほじゃない！」

と、ちゃんと目を見て怒った。

でも、なんだかだんだんおかしくなつて

「あつはははははははははは！」

二人とも笑ってしまった。

~~~~~

「で、どーすんの」

漣尾のベッドを借りて先ほどの重症を治してもらっている最中、私
は漣尾にそんなことを聞かれた。

「……どうしょ。正直、決めてないっす。」

私は少し、ベッドに座っている漣尾の顔を覗き込んだ

少し考えこんでいるようだ。

「うーん……」

「どうかしたの？」

漣尾は考えながら話す。

「いやさ、普通、聖杯戦争するのは監督役っていうのがいてね、こう、
参加者の中でズルしやがる奴がいないかっていうのを見張る役なん
だけど、同時に聖杯戦争の事後処理役でもあるわけ。んで、楓花のよ

うな何にも知らない『巻き込まれた人』もそつちに駆けこめば保護してくれるんだよね。」

滯尾はさらに、少し真面目な顔で話した。

「問題はそこ。――結論から言うと、私もこの聖杯戦争の主権者が正直誰なのかわかっていない。から、監督役も全然知らないんだよね。」

「へえ〜。」

へえ〜。しかでない。こんなにしっかりとっかきしてらんだな聖杯戦争って

いやちよつと待て

「えっじゃあそれって、」

「気づいた？ ……まあこんなことないだろうと思うけど、極論、色々ガチでやべーやつが荒らしたりする可能性があるってわけ。あと…監督役って嘘ついて令呪をだまし取るマスターや魔術師が出てくるってことも全然ありうる」

「うおお…。」

「まあ主催者も魔術師だろうし、それもこんな日本の辺境なところで聖杯戦争するくらいだからさ、何か変なことでも企んでるんだと思うけど…やべーやつの暴走より、令呪詐欺がいちばん怖い…かな。」

恐ろしいことだ。 あつこれ戦争だった。 忘れてた そんじよそこらのお祭りじゃなかった

「うわあ…すごいね。気を付けないとね…。」

滯尾はぼかんとした。

「えっ、私、今あんたのことを言ってるんだよ？」

「ええっ?! 私そんな最強じゃないことしないよ!」

「いやそうじゃなくてさあ。逆。楓花が騙されるの。 楓花さ、ほとんど知らないでしょ? 聖杯戦争とかサーヴァントとか」

「ああ…うん、アハハ…。」

滯尾はため息をついた。

「わかった。じゃあさ、楓花。これは提案ね? 両方にとってウィンウィンな—」

滯尾が話を切り出したかと思うと、セイバーがドアを強引に開けてきた。

「おい！楓花ア！ キャス坊の奴アなかなか面白れえぞ！ 魔術師つてのは陰険な奴か胡散臭えヤツしかいねえと思っただがな。決めたぜ。てめえは最後にはらってやらあ。」

セイバーはキャスターの頭を強くガシガシになでている。．．．いや、キャスターの頭をゲームのスティックのようにぐらぐら動かしている。

「お気に召していただけて何よりでございます！ サムライの方。いやはや。あとその、レバーのように私の頭をぐらぐら揺らしなざるのを少し遠慮なさったらうれしいのですが。」

キャスターさんは頭が爆速で揺れながらもお構いなしにキャスターさん節である。

「ちようどよかった。キャスターとセイバーも打ち解けたみたいだし．．．」

滯尾は単刀直入にその言葉を口にした。

「同盟、組まない？」

同盟．．．

「同盟？」

「うん。私と楓花はお互い、戦うことはしない。まあ、その場に依じて協力してほかのサーバントを倒したり、最後まで生き残ったり．．．的なの。」

「それって、最後はどうなるの？ 私と滯尾だけが残ったら」

滯尾は、当たり前でしょ？みたいな顔で返した。

「そりゃあ、私と楓花で一騎打ちだよ。」

「ええ．．．」

「どうすんの、嫌なら、楓花、すぐ死ぬよ？」
だよね。

「うくん．．．いいよ。ってかお願い。仲間になってくださいー！」

私は滯尾に右手を差し出した。

「．．．楓花らしいや。」

滯尾は笑いながら私の右手を、滯尾の右手で握って応えた。
こうして、私と滯尾の少し小さくてすこし大きい喧嘩は幕を下ろしたのであった。

第7話　いくさ間も無し　備えよ乙女

朝というのは本当にイイ時間だ。

お天道さんものぼりはじめ、空気が『澄み渡っている』この感覚が実に最強

風が冷たい感じだと、もう100点!

私はこれが止められなくて朝早く起きて登校をしている、というのもある。

というかそれが主な理由なのかもしれない。

校門を越える。校舎の前の坂道は少し急だけど私にとってはちょうどいい運動だったりする。

校舎に入り、私はすぐに部室に入った。

すると、思わぬ来客が。

「おや！ミス・カンナギ、ようやくいらっしやったようですね!」

「あ、キャスターさん、・・・おはようございます。つてことは滯尾も?」

キャスターさんは部室にある将棋の駒でピラミッドを作っていたようだ。

登山部も、実は学校の開いている部屋を部室として使わせてもらった。おそらくきつと、前は将棋部がこの部屋を使っていたんだと思う。

今は6段目、もう少しでピラミッドが完成するところ。

「ええ、ただいま職員室にて先生とお話をしているようでございます。私は待つようにと頼まれたんですが・・・私手が落ち着かぬ性分でございます。生前からの趣味も人つ子一人おらぬようでは腐ってしまうようなものでございます故に・・・暇つぶしにはなかなかのポリウムにございますね!」

そう話しているうちに、滯尾は部室に戻ってきた。

「ああ、楓花。いたんだ。」

滯尾はどうやら、私の包帯の巻かれているところをみたのか。

「昨日は、…その、ごめんね。」

濡尾は暗い顔をして私に謝った。

「ああ、いやダイジョーブだって！もうすぎたことっしよそれにさ、走れるようになるまで治療してもらったしもうフェアってことで！」

濡尾はちよつと笑った。

「それにさ、元はこっちだし、謝るの。」

場が少し辛気臭くなる。

カシヤン、とトランプの三角が水平線になった。

…

「いやはやー！このままだと空気もどよんと重くなりてございますゆえ、他の話でもされたらどうです？ 私は邪魔にございましょう。

カードの手癖には自信がありますよ！あつという間に、はい！」

キャスターさんはそういうと、ばらばらになっていたトランプのカードをすぐに束一つにまとめた。本当にあつという間だった。

「あつそうだ。昨日の、あの子のことなんだけどさ。」

見当はついている。アサシン（仮）の人である。

「あのあと、すごかったよねえ。」

「うん。担任に話したら、二木さんは意識を取り戻したみたいなんだけど、片頭痛が起きたり記憶がいくつか抜けている、みたいなこと言ってた。」

「うへえ…、濡尾、もしかしてその二木さんに打ったワクチンみたいなもののせいじゃない？」

若干私は冗談交じりで言った。

濡尾は若干考えるように抱え込む。

「いや…うーんあのワクチンはキメラ専用だしぶっちゃけ人に打つと悪影響が出るのは否めないけど…おかしいんだよね。」

マジになつちやつたやつ

「あくまでもあれは睡眠剤というか…若干のスタンガン、スタンワクチン？みたいなもんだけど、頭痛はともかく記憶までは干渉しないはずなんだよね。なにか絶対種がある。」

へえ、と行ってしまった。

「それよりさ、どうだったの。そつちこそ。」

不意に濡尾が質問を投げかけてきた

「へ？ああ。私?!いや私はその二木さん……には何もやってないよ」
「いや、あの後。お爺さん相当怒ってたくない？」

「あ、そつち？ いや〜大丈夫大丈夫！ げんこつ一発で済んだし。」
私と濡尾はあのドンパチの後、倒れている二木さん（ちなみにこの子の名前は今さつき知りました……昨日は色々あったし……）を119で病院に連れて行った。

二木さんが意識不明で病院に運ばれたことから、そのあとは110もおまけで来て私たちは事情聴取を受けた。

……が、なんかあつさりいった。

後から聞くと、濡尾はちよこつと警察に暗示なるものをかけていたらしい。よくわかんないけど。

その後、保護者が来るまで警察署まで待つように言われ、その後おじいちゃんがきて、警察や濡尾にあいさつしながら深々と頭を下げて「何しとるかお前は。早来い^{はよ}」

と、げんこつを一つ食らって家に帰った。ただそれだけである。私も一応、すみませんでした。と警察にお辞儀をしてからじいちゃんのところへ行った。

「それだけ。」

私は何ともなく言った。何ともないんだもん

「まあそれならいいけど。」

「じゃあさ、放課後、少しどつかで話そ。」

濡尾が言ってきた。

「何を？」

「……色々。」

予鈴が鳴る。もうおしゃべりは終わりのようだ。
「んじゃ、終わったたら私のクラスの前で待ってて。」

と濡尾は部室の扉をばたんと閉じて消えた。
教室に入る。

「覗さん。」

「ほえあ!？」

急にびつくりした。

「隣のクラスの倒れているの、見たんだって？」

5、6人が私を取り囲んで聞いてきた。

「ああ、うん。」

「それで、今はどうなってるって・・・？」

「うくん、記憶がトンドる？っぽいよ・・・」

今までかかわらなかつた子たちが急にぐいぐい来るもんだからたじたじしちゃっている。いかんぞ覲。最強じゃない。

ぐいぐい来る子たちは勝手に話を進める。

「ほおらやっぱり。最近ここら辺おかしいって。」

「二木さん昨日は登校してたよね。今日は？」

「いなかった、ってさ」

「ええくやばいじゃん。」

ぽかん、と立ちながらもそういえばここ最近物騒だなあ。とはよく聞く。

「あつあとさ。谷城のホテルで喧嘩のあとガラスが割れたって。」

ひやり。

「それはさすがに関係ないでしょ」

「考えすぎだって」

「ええく私は関係あると思うなく。」

勘が鋭いなこの子

しかしほかの子たちは、あまりにもちぐはぐだと笑いながら騒ぐ
今がチャンス・・・!

私はすぐ席に着いた。

くくくくくくくくくくくく

授業が終わると、私はすぐ滯尾のクラスの前の廊下で、滯尾が来るのを待っていた。

「お待たせ。」

しばらく待つと滯尾が来た。担任と話していたしきつと昨日のことかなんだろうなあ、と

歩きながら喋る。

「担任と話していたの、昨日のこと？」

「いや、欠席してたじゃん？あれでなんで二木さんを連れてこれたんだって。楓花。私のことねん挫って言ったのもきいたよ。」

「うん。ホテルの時、こう、巻いてたじゃん？あの巻くやつ。」

語彙力

「うん。伝わるからいいよ。」

「だからそうなのかなくって」

「なる」

無気力な会話である。

「んで、どこ行くの？」

「家」

滯尾は即答した。

「さ、入って入って。」

昨日よろしく屋敷に入る。

「あ、セイバーもせっかくだからもう霊体化解いて大丈夫だよ。」

あつそうだ。セイバーがいたの忘れてた。

「・・・んじゃ、実体化するぜ。」

「ごめん、セイバー。すっかりいるの忘れてた・・・」

セイバーは豪快に笑い飛ばした。

「だッはッはア！ま、そりや、俺ア『ガッコー』つちゅーもんを俺も黙ってみていたからな。」

なぜかセイバーは得意げに語る。

と、入ったはいいものの、滯尾を見失ってしまった。

「つて、あれ？滯尾は？」

すると、どこからともなく、少し洒落たスーツ姿の見知った姿が

「マスターは何やら準備をしていらっしやるようで！ええ。ささ。私がお案内いたしましょう。」

案内されるまま進むと、そこには昨日の有れようとは大違いなほど

にきれいになっていた。

居間と思われる広い空間の真ん中には、低めのテーブルとその高さにあったソファがあった。

キヤスターさんが、どうぞ。といったので私とセイバーはそれぞれ適当なところに座った。

「ふう。．．．どっこいしょ。」

青くて分厚いファイルをどさつと音を立ててテーブルの上に乗った。

ファイルには「聖杯戦争」と書かれてある

「え、何それ。」

「聖杯戦争の情報とかいろいろ。集めるの大変でさう。」

私は一つ手に取ってパラパラ、とめくった。こんなにも集めたのか．．．と感心した。

「楓花、ロクに聖杯戦争のこと知らないでしょ。」

唐突に聞かれて、そーいやそうだ。とはつとなった。

「セイバーに教えてもらったこととか、．．．それくらいしか思いつかないなあ」

えへへ、と笑ってごまかす

「まあそうだろうと思った。から今から手取り足取り教えてあげる」

セイバーは濔尾に視線を感じたのか、セイバーは急に釈明をし始めた。

「なあ嬢ちゃんよ。そりゃあ説明責任はあるのはわかってるぜ？だよ。あん時や何から何まで急だったんだ。契約するかどうかくらいの話だぜ？付け焼刃程度の知識しか俺は教えねえよ。」

正論に聞こえるが、なんだか腹が立ってきた。

「はいはい。それじゃ。教えるね。」

流れるようにいなした濔尾は、そのまま授業を始める。

「まず『聖杯戦争』が何かわかる？」

単純だけど唐突な質問。これはたしかセイバーに教わったやつ

「えーとね、分かるよ。確か、7人の魔術師．．．参加者が『聖杯』を取り合って戦うんだっけ。んでその『聖杯』はなんでも願いをかなえ

ることができる。　　そうでしょ？」

「うん。合ってる。」

　　漣尾は頷きながら説明を始める

「で、その聖杯戦争において重要なのが『サーヴァント』っていう存在ね。セイバーからサーヴァントのことに關して聞いていない？」

「うーん。まず、『契約しないとマリヨクが切れて消滅してしまう』とか、レイジユとかなんとかは聞いた。それ以外のことはあまりわからないかな。」

「もつと教えたはずだけどねえ。」

「あの時はね、色々あつたし、えへへ・・・」

　　セイバーは半ば呆れながら、挑発にのる5秒前のような顔をしている。

「うん。オツケーじゃあ私が教えるから、」

　　漣尾はすぐなだめた

「サーヴァント・・・英霊つてたまーに呼ばれたりするけど、過去の伝承とか昔話、歴史の偉人をこう、魔術的なアレで召喚するらしいの。詳しいことを話すついでにいけないと思うから話さないけどね。実のところ私もちょっと時間かけて読まないと分からないところがあつたし。」

　　漣尾は続ける。

「サーヴァントは7つのクラスがあつて、召喚される際はそのうちの1クラスで召喚されるの。うん。そう書いてある。」

「クラ・・・ス・・・？」

　　漣尾が口を開ける前にぴきーんときた。

「あつ、待って！わかった！待って待って待って待って待って!!!アレでしょ！セイバーってヤツ！」

　　漣尾はうなづいた

「そう。それ・・・でも楓花、他のクラスわかる？」

「ちよつとまってるね・・・えーと、セイバーでしょ。キャスターでしょ、アサシン？も入ってるんだよね。あとは・・・ラン・・・忘れた。」

「オツケー。全部教えるね」

そういうと、漣尾はファイルをパラパラ、とめくった。

「えーと、あった。これ。セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、そしてバーサーカー。これで7つ・・・って書いてあるね。んでさ、サーヴァントって真名があるって言ったじゃない？でも真名がお互いわからないから、お互いクラスで呼び合うらしい。」

「なるほどね。それで最初からセイバーとかキャスターとか。」

「実際最初から相手の真名がわかりや世話ねえんだけどな。武器とノリで分かるし名乗るやつはクラスを自分から言いやがるからな。そこんところは問題ねえさな。」

こういう感じで、漣尾の、聖杯戦争講座は1時間かけて終わった。「なるほどね・・・なるほどなるほど。・・・大体わかった。ありがとうね。」

「うん。」

漣尾はすくつと立ち上がり、くるつと後ろの方を向いてどこかへ行くこうとする。

「漣尾、どこか出かけに行くの?」

漣尾はきよとんとしている。

「何って・・・今から戦いに行くんだけど。」

早すぎない!?!と声が出てしまったが、いや、そういうものなのか。と私は理解した。

戦うときのような嵐の雰囲気って、こういう静けさの後に急にくるんだもん

「楓花は?こつち的には協力してほしいけど、爺さんに昨日こつぴどく叱られたでしょ。」

「爺ちゃんのこととは大丈夫だと思う。夜遅く出歩くのはあまり怒らないんだ。そこんところずれてる人なんだよね。」

我ながら思う。昨日は頭に山ができるほど痛かったし、そこんところの線引きがガタガタなのは・・・?

「じゃあ、ついてきて。」

濡尾は若干にやつと口が緩みながら、立てた親指でいく方向を指した。

向いている方向を少し良く見ると暗くてよくは見えない。

しかし、私には不安はなく、むしろワクワク50パー、ドキドキ50パーで中身が埋まっていた。

~~~~~

これは、奇怪な事件が起こるようになった海谷市の、岸城きしろと宇津木うつぎという二人の男による奇妙な体験である。

窓越しにうつる紺色、目の前には扇形の光が二つ。

運転席の中央に埋め込まれてあるデジタル時計は「21:37」の数字列を見せている。

『高瀬』のほうで水道の破裂が起こったらしく、その調査をするために俺と宇津木が突発で駆り出された。

俺だけでもいいとあれほどいったんだが、新人の教育のために、ということでも宇津木も連れていくことになった

「―続いてのニュースです。相次いで起こる失踪事件、またも海谷市に行方不明者が出ました。行方不明になっているのは高校生の―」

行方不明、意識不明、こういうのが相次いでいる。なんでも夜にふらついている人が帰ってこなかったり、病院でおねむの状態に戻ってくるんだとか。

いつもだと車の量が多くて渋滞を起こすのもしばしばあったが、おかげで今じゃその車も少なくてすいすいける。

「この連日続く海谷の失踪者は現状100人を超えており、これにより観光業に大きな被害が出ている模様です。」

無味乾燥なラジオの声から発せられるとてつもない内容には内心驚かされる。

「やべーっすよね。これ。」

助手席に座っている宇津木はゲームをしながら世間話を切り出した。

「まあ、そうだな。上もさっさと、早いうちに帰らせてくりやいいんだけどな。」

「そーっすねえ。夜早く店も閉まるようになりましたし、こちら辺の夜景もなくなりましたよネ。あの景色マジで好きだったんだけどな。」

窓をちらつと見て宇津木はすぐゲームに戻った。俺も寂しくてすこし歯がゆかったので窓の方へ眼をやった。本当に暗い、しか感想が出ない。

左折しようとするのを確認すると、サイドミラーに少し大きなトラックが走るのが目に留まった。

まあ疲れてるんだろ、と俺はランプをたいた。

と、先ほどのトラックがすごい物音を立て、電車のような速度でこちらを通り過ぎた。

「うおっ。」

さすがに俺も面食らった。

「あのトラック・・・やばくないっすか。キシロさん。」

「俺も長いこと外で仕事してるけどよ、あのデカさは見たことがねえな・・・」

かれこれあって、現場についた。とりあえず現場をポールで囲んでおく。

改めて、俺と宇津木は破裂している水道を見て調べる。

「ふう、これか・・・」

道路に亀裂が生じ、水道管がむき出しになっている、

しかし、どうやらおかしい

「ちよつといいつつすか。キシロさん。」

「ああ。」

こんな漫画みてえなことおきるわけがない。

「コレ、誰かがやったようにしか見えないっすよ。どうみてもこれおかしいっすもん。」

経年劣化によるものにしてはあまりにも新しすぎる。

「とりあえず、もつと調べるか。」

と、俺は宇津木に手取り足取り教えながら調査に移った  
しかし、

「うーん……」

「やっぱりあれっすかね。」

「そうだな。これに関してはあまりにもレアケースだな……」

どう報告書を書こうか。原因不明と書くか人為による損壊と書く  
うか考えこんでいた。

「とりあえず、もうここら辺の作業は済んだし、帰るか。お前、家近く  
か?」

「いや、すみません。職場まで送ってもらってイイツスカ?職場のほ  
うが近いんで。」

「おう。せっかくだし飲みモンくらいは奢ってやるよ」

うつつ。あざつつ。と宇津木は会釈をした。

「じゃあ、リンゴジュースで。」

斜め上の注文で耳を疑った。

「おまえ、変わってるな。コーラとか、コーヒーとか飲まねえのか。」

「ああいうのあまり好きじゃないんで。炭酸は腹壊しますし、コー  
ヒーって苦いじゃないっすか」

「ハハハ。最初は、カフェラテとかでなれたらいいんじゃないか?」

「……イイツス。とりあえず、リンゴジュースで。」

少し不機嫌そうな後輩はせめてもの愛想笑いをした後助手席へ向  
かう。

にしても、不思議なことが立て続けに起きるもんだ。と俺は運転席  
のドアを閉めてエンジンをかけた。

新人にしては物覚えが良く、作業もすんなりいったが、時計には  
「0:45」と表示されている。

眠気がすこし頭の中を支配し始めている。

宇津木をちらつとみたが、ゲームをせずにフロントガラスの向こう  
を見ているようだ。ゲームの音が聞こえてこない。

「どーした宇津木。眠いのか？夜間は初めてだろ。寝てもいいぞ。」  
と笑い交じりに言ってみたが。宇津木からうんともすんとも帰つてこない。

「宇津木？」

あまりにもおかしいと思ったので宇津木の方をみた。

「先輩、あれ・・・」

指がさす方を見ると、先ほどのトラックが空を飛んでいる

いや、先ほどの、馬鹿デカいトラックなんだが、明らかに何かがちがう。見ているだけでおかしくなりそう。禍々しさと神々しさがあるような・・・

俺は直感で「やばい」と感じた。

「おい、宇津木。しつかりしろ。」

宇津木はまるでこっちの声がかきいていないようで。ついにはドアを開けて車から降りようとした。

「ああつ・・・くそつ・・・！」

俺は宇津木を助けようと身の回りのものを探し始めた。

あつた。

休日に家の日曜大工の際につかっていたロープと、夜間作業の時のアイマスク。

外に出てる宇津木を俺はすぐに追いかける。

「宇津木、スマンツ・・・！ふんっ！」

ヘッドロックをかけてオとし、車へ引きずる。

アクション映画の見よう見まねでやってみたが・・・。あとはコイツが起きることを祈ろう。

起きても暴れないように、またあのトラックを見ないようにと俺は宇津木を縛り、アイマスクをかぶせた。

上へ少し目をやると、またあのやばいトラックが空を飛んでいる。俺は視界に注意しながら、暗い道路を全速力で走らせる。

しかし、走っているときにもおかしいことが起きるばかりだった。

「何じゃこりや・・・」

今まで人っ子一人いなかったここらへんの通りに、人がわらわらと

出てきては、その焦点が合わない目で上のデカブーツへ向かって歩いて  
いる。

「やべえ、やばすぎる・・・!」

一刻も早く職場に戻らなくては・・・しかし道路歩道の判断すらつかない  
ようで、ハンドルを右左と素早く回す。

「ハア・・・ハア・・・」

一心不乱にフロントガラスとその先に照らし出されるコンクリー  
トだけに目を凝らす。じやないと宇津木の二の舞だ。

が、

「うっ・・・」

少しずつ、ではあるが幻覚がうっすら見えてきた。

これもアイツのせいか・・・?

ここでトんだら・・・

「クソっ・・・!」

頭突きでクラクションをならし、音と痛覚で商機を取り戻した。

「絶対に、絶対に生きて帰ってやる・・・!」

こうして、俺は『谷城』へ出た。

『谷城』を抜けた途端、空を飛ぶトラックは見えなくなったのでコンビ  
二にとまると宇津木の縄をほどきアイマスクは・・・職場に戻るまで  
そのままにしておいた。

翌日、破裂した水道の調査にもう一度向かおうとすると、所長にと  
められた。

なんでも、急遽別の会社が調査と修復をやってくれることになり、  
やむなくこつちが引かざるを得なくなったらしい。

そうですか、と自分は机に戻り別の報告書を書こうとした。

「先輩、昨日はありがとうございました。」

声をかけてきたのは宇津木だった。

「おう。宇津木。大丈夫だったか。」

「? いや、自分はあるのあとフツーに起きて家に帰りましたけど。  
あーでも、なんか肩が軽くなった気がします。」

「そうか・・・」



若干苦笑いをしてしまった。いや、よくなるのかい。にしても、昨日のことはさっぱり忘れてしまうのか。

いや、もしかしたら、こっちが変なのを見ていたのかもしれないな。

「あっそうだ。宇津木、コンビニ行くぞ。」

「え、何スか。」

「何って、昨日の約束だろ。昨日お前眠っただろ？来いよ。今日は少し気分がいいから、弁当も奢るぞ。」

「え、マジっすか。」

少し宇津木は笑いながらも、俺の後をついていった。

「宇津木、お前は、リングジュースだったか。」

「いや、・・・イチゴオレにしよっかなーって」

おお・・・おお!?・・・おお・・・となる回答だった。

「そこは、カフェラテじゃねえんだな。」

「せめてもの妥協点です。毎日成長っすよ。」

不思議なことは、立て続けに起きるものなのだ。と俺はつくづく思いながらも、コンビニへ向かった。